

【資料紹介】

翻印『昌平学分類雑載』―其一

町 泉寿郎

解題

ここに紹介する『昌平学分類雑載』は、昌平坂学問所に関するさまざまな幕府公文書を教育施設、教職員人事、試験制度、管理体制、儀式次第・儀式備品、経済基盤・財政収支など内容ごとに分類整理したものであり、昌平坂学問所の学校制度に関する膨大かつ組織的な記録である。管見の限り尊経閣文庫に所蔵される写本が唯一の伝本であり、現在十八冊に分けられたその分量は、合計二三〇〇丁を超える。

外題は各冊、洪引表紙左肩に貼付された題簽に墨書され、第一冊「分類雑載 公事 利上之乾」から第十八冊「分類雑載 支配人止」に至る。また各冊表紙右下には「共十八本」の墨書があり、完本であることがわかる。分冊の概要は次の通りである。

第一冊 公事 元上之乾 一五〇丁（含総目録二丁、元上目録四丁）

第二冊 公事 元上之坤	一九丁
第三冊 公事 元中之乾	一〇五丁（含元中目録七丁）
第四冊 公事 元中之坤	一三七丁
第五冊 公事 元下之乾	一四八丁
第六冊 公事 元下之坤	一三五丁
第七冊 公事 亨乾	一二九丁（含亨目録五丁）
第八冊 公事 亨坤	一二九丁
第九冊 公事 利上之乾	一六丁（含利目録五丁）
第十冊 公事 利上之坤	一三七丁
第十一冊 公事 利下	八三丁
第十二冊 公事 貞上	一三三丁（含貞上目録二丁）
第十三冊 公事 貞中	六一丁
第十四冊 公事 貞下之乾	一四〇丁（含貞下目録二丁）
第十五冊 公事 貞下之坤	一五四丁
第十六冊 支配天	一四九丁（含目録四丁）

第十七冊 支配地

一八二丁

第十八冊 支配人

一二七丁 (含目録五丁)

内題はなく、目録を掲げる冊のみ次のように目録題がある。

第一冊「分類雜載公事昌平坂元卷目録」

第三冊「分類雜載公事昌平坂元卷之下目録」^中

第七冊「分類雜載公事昌平坂亨卷目録」

第九冊「分類雜載公事昌平坂利卷目録」

第十二冊「分類雜載公事昌平坂貞卷目録」

第十四冊「分類雜載公事昌平坂貞中卷目録」^下

第十六冊「分類雜載公事卷之十三ノ上／支配上卷目録」

第十八冊「分類雜載公事卷之十三ノ下／支配下卷目録」

したがって本書の本来の書題は「分類雜載」であり、「昌平学分類雜載」は尊経閣文庫における整理時に与えられた書題かと推定される。「分類雜載」という書題を持つ記録に、長崎奉行所で作成された『長崎奉行所分類雜載』（長崎県立図書館所蔵、写本四冊、『郷土史料叢書』二〇〇五年に翻刻収録）があるのは注目に値する。『昌平学分類雜載』の正確な編纂時期・成立時期を示す文言はないが、収録された文書は天明末・寛政・享和・文化初まで約二十年間のものが中心で、先例先格を引く場合にしばしば宝暦頃まで遡るが、下限は文化四年（一八〇七）頃までである。文政期の編纂とされる『長崎奉行所分類雜載』とほぼ同時期の編纂と言ってよく、これらが幕府機関に

関する大規模な編纂物のそれぞれ一部である可能性を推測させる。

天明末から文化初にいたる約二十年は、言うまでもなく松平定信の政治改革の下で林述斎や寛政三博士らが聖堂附属の林家私塾から幕府直轄学校へと学校組織を改革し、昌平坂学問所を核にした大規模な教育改革に取り組んだ時期に当たる。『分類雜載』に収録された文書は、彼らが幕府直轄学校としての権威と内実をいかに構築したかを如実に伝える史料と言える。

『昌平学分類雜載』の形式上の特徴としては、「目録」の項目の下に数字が振られおり、当該本文の丁表のどの上部に同じ数字が記されている（目録は全項目に数字が振られているが、本文は振られていない冊も多い）ことや、本文の見出しとなる語句に対して朱筆で四周を囲ったり傍線を引いたりしていることから、検索の便を考えた編集になっているといえる。

内容上の特徴としては、幕府直轄学校の権威化という問題と密接に関係して、孔子祭祀の儀礼、いわゆる「積業」執行に関する記録が巻頭に置かれ、かつ分量的にも多く、重視されていることが分かる。幕府に提出する積業の執行伺には、決まって「上ヲ奉祝」の語が使用され、林大学頭にとって湯島聖堂の積業が將軍の善政を称賛するものであったことに改めて気付かされる。

特に述斎が寛政五年に林家養子となり大学頭を継承して以降

の積業記録は生々しく、述斎の並々ならぬ熱意と幕府文教の柄を乗るにふさわしい能吏の素質を伝えている(66a以下)。このころ聖堂は天明の大火によって焼失し、再建は寛政十一年のことであり、祭器も焼失し(聖像は災害時に当番大名が厨子ごと搬出するのが習わし)、俄か拵えの「仮仕切」の場所で「略式積業」を執行するのが精一杯であったことが分かる。不十分な施設であっても寛政八年秋の「略式積業」は、学問所学における学問奨励策が浸透しつつあり、晴天にも恵まれて、出席者からの寄附が大幅に増えたらしい。同年春の積業に銀二両(百二十匁)寄附した者が、秋の積業の寄付金は金百匹(一分)に増額したなどと記しているのが、時勢の変化を感じさせる。

このほか、『分類雑載』の編纂時に依拠した一次資料の資料名も散見される。ほぼ積業関連記事に終始している第一冊の場合、最も頻繁に参照されるのが『積業伺留』である。他に『昌平日乗』や林百助の『百助日乗』など日記資料も参照していることが分かる。

紙幅の都合から、本稿に掲載できるのは第一冊の約半分にとどまるが、江戸期の公文書を通して昌平坂学問所を核とした幕府の教育行政の一端を窺うことは十分できると思う。また巻頭の総目録は資料の全体を概観するには便利である。

なお、本翻刻は武田祐樹・鈴置拓也・千葉有斐ら有志諸君

との研究会において読み合わせを行い、主に鈴置拓也君がデータ入力作業に当たったものを基に、更に整理したものである。

【翻印】

凡例

一 以下の翻印の底本は、尊経閣文庫所蔵の写本『昌平学分類雑載』であり、本稿はその第一冊の第一丁から第七十四丁までを収録した。

一 翻印はできるだけ底本の体裁を残すことを基本とし、漢字表記については、できるだけ底本の用字に従った。

一 底本の変体仮名は、平仮名・片仮名に改めた。

一 底本の行詰め・字詰めには必ずしも従わなかった。

一 丁表・丁裏の変わり目には(1a) (74b)を補入した。

一 底本に朱筆で記されている箇所は、小字ゴチックにして示した。

一 底本の誤記と思われる箇所には、その右傍に私案のあるべき字を丸括弧に入れて添えた。

昌平坂惣目録

元上ノ乾

元上卷

○ 積葉

積葉式

說經讀詩

六時揃

大學頭幼少長病服穢等故障在之積葉致延引候義不相濟事ニ候

備物并器物

延引伺

御服中ニ付當八月來二月共

二月中御服中ニ付三月

御服中私義も病氣

私服中ニ付當二月八月共

私服中ニ付代り百助

私病氣ニ付代り百助

悴病氣ニ付一名ニ而伺

悴病氣ニ付延引伺

代り百助病氣ニ付延引伺

御轉兼ニ付三月江延し

朝鮮人來聘ニ付延引

御修復ニ付延引

樂人差支ニ付延引

不延引否

主上崩御

水戸殿卒去

近火始り刻限ハ遅成

近辺御成

御代々重キ御精進日ハ除候得共一通り之義ハ除不申候

御服明ニ付伺

審^着服

御代替ニ付束帶

裝束下足袋用

尾張殿令尋

六位袍

狩衣

嫡子

九歳罷成候ニ付布衣着用

十歳ニ付私是迄之役義為勤

老年

聖堂勤御免願

幼年代り百助勤

表儒者

伺之事

百助連名

百助一名

(1 a)

(1 b)

(2 a)

一名伺書

廿日程前二伺

若年寄衆江は達不申

伺席之事

畧式积菜

假殿积菜記

場所引渡雨天

服穢

御服穢被成御座候内江伺

服中二而伺書出ス

昌平今登城又昌平

丁日障

拝見之者

書付渡

頒俎

御伽羅拝領

足痛所二付圖書頭御供所今出ル

御部屋番江渡小札

幕張前日取立

仮張雨除桐油

饗應伺

閏正月

(2 b)

御名代

月次二积菜

儒者何人宛罷出候哉

御幣祝文

他門之者不罷出

积菜濟御届

樂人遅刻

樂人出役御下知

元上ノ坤

○拝見之義聞合

拝禮席

伺濟諸向江掛合書

大名衆之家來門人被差出候様奉札

門番所幕打

登城二付習札刻限遅成

献官并分献分奠二付伺

附御納戸御腰物方今六位袍并太刀請取一件

諸品

參拜人年頭御構内一覽願

御成

御通拔

御參詣

(3 a)

(3 b)

御役人見分

御目付江掛合

御道具類差出置

場所由緒書付

御通拔御成

小金御成

近辺御城裏通通御

元禄古例

御三家參拝

學規

仰高門講釈所掛札

廣業堂張札

學規職員記

薩州今頼ニ付學記認遣ス

御道具類御城江差出

元中ノ乾

元中卷

御主法替釈奠

○釈奠之儀伺

白木品

鉄鈍子

員長六役別火と申趣意ニ而御座敷ニ而食事等致來候義

御焼飯 附樂人御賄料

釈奠伺并諸御断

拝見人

御名代

御三家御兩卿名代

名代献備使者

献備銀員數并御觸

釈奠前日御目付出勤御断

献備承合せ

取扱伺

裏門前固其外献備使者一件

使者刻限

御先手引渡

郡代支配御勘定組頭^付

大目付届出候書付

万石以下拝礼着服備物

御役人方參拝着服

自分着服

使者時刻延引半袴ニ而謁御目付同断

本多内蔵助 吉川和三郎 御三家御附家老

當日服明ケ

(4 a)

(5 a)

(4 b)

(5 b)

遷座方固人數

明日献備之申談

献備當日

上張

御式濟拜禮

堂領名主

觸出手紙

說經問答

积奠當日

假殿积奠

新殿积奠 此後积奠此部二記 取扱之事同上

庚申二月积奠記

积奠調勤候門人江被下物 利卷學問御吟味之部下二記

御主法替

聖堂名目替

御座敷向講堂學寮御手入建増

掛儒者御役宅 儒者衆江書付渡

掛御目付 并御目付江届等

定式寄合 昌平見廻

(6 a)

元下ノ乾

元下卷

御主法替

○聖堂領関東御郡代支配

素讀御吟味之御入用ハ御定金之御勘定

大貫治右衛門當分御預り所

郡代跡役被仰付候迄當分之内心得

米金等ハ御郡代役所江預ケ置

御場所御入用勘定帳 元下加百三十一

都而飛驒守打合セ候筈兼而御内意も有之飛驒守心得置

可然程之義は其時之見計自分達置候様

堂領引渡

堂領金

献備金

百三十人扶持拂代

御普請御修復等伺

六拾匁以下ハ手限りニ取扱

御疊替定式

御修復見分定式

元下ノ坤

御教育

○長崎書籍學問所書籍御入用出方之義此部

(7 a)

(6 b)

(7 b)

(8 a)

(8 b)

昌平三ヶ所之帳面―殿江―を以差出ス

万石以下子弟御教育御觸

御褒美二階稽古出席帳

出役江弁當料

御文庫御書籍始末來歴

百三十人扶持

御給金番所道造

(9 a)

御給金番所之義御目付江問合

町番屋建替

杉浦丹波守拝借地届

物揚場

松飴

火防

御普請中加賀守人数掛り候義御達 亨卷力百十二有之

(9 b)

火之見

御朱印

學中諸坐

御扶持方 附毎月増減御届

諸生申渡拙者門人御場所書生寮罷在修行―此部

寄宿人

御買上御用品諸負

聖堂御藏板向彫刻願

服穢 亨卷二も

聖堂御清御定

下馬札 制札 亨卷二も

御成御門

御納品願

御用長持御紋附

坪數惣繪圖

聖堂事實

(10 b)

亨乾

亨卷

○再献納

焼失二付献納願

上ヶ御献備

紀州再納

阿州旧記

増減届

書籍御道具書上

附長崎新渡書物買請之起

祭器拝借

書籍拝見

虫干樟腦

修復

献納

亨坤

○御手傳

寄附物

内記家來請取

寄附銀御尋

尾州ノ御尋

服穢二而献上

出役御徒目付

寄附物員數御尋

御扶持方

米性不宜

九拾五人扶持

百人扶持

附三拾人扶持

御證文願

御證文渡

附手形案

熊藏跡目并勤方等未被仰付以前請取方

同家督被仰付候二付請取方

(11 a)

百人扶持御證文渡

三拾人扶持同断

聖堂住居之儒者肩書二加印と認

加印儒者差障り候節手形紙之事

御同朋頭江使者二而御裏印頼遣

同断手紙二而頼遣

御裏印申上未相濟内本郷辺出火退出

寅之字認落

年号改元御裏印取直

迁座御用

被仰付候段御月番ノ達

火防之儀被仰付

火防手當二不及

忌中

人數延着不手際

迁座方ノ勤番

御仮堂出來迄ハ迁座方江聖像御預り候古例之旨答之 (12 b)

附迁座場所

類焼ハ致候得共迁座方骨折候段申立

出馬御届

桜之馬場迄迁座

御殿跡迄

(12 a)

仰高門迄

筋違橋外空地江

御普請中ニ付御作事奉行相詰申候

出馬無之候得は御届ハ不申遷座方ハ御届在之

外ニ御届無之分此所ニ記ス御届在之ハ追加之内ニ出ス

図書頭出馬

大学頭病死ニ付當分御目付出馬

仮仕切江相詰申候

不及遷座候得共出馬有無共此所江出ス

御社參御留守

小金御猪狩

(13 a)

遷座道具入置候小屋遷座方ハ普請在之遷座方人足呼出シ

御普請中加賀守火消人數掛り候御達

此餘御主法替火防部在之

人數大概

雪かき人足

出火之節 御主法替後ハ御主法替火防部下ニ記

諸生勤方

火除地之來由

火消

出火之節御紋付挑灯

類焼

(13 b)

宝藏之焼跡ハ此方ニ而繩張取片付

御飯堂出來迄ハ遷座方江聖像御預り候古例之旨申達

遷座部ニモ

町奉行見分ニ被參

諸生當分身寄之方江致寄宿候様達ス

本牧領名主共勤番申付

六役勤方

地震之節

仰高門制札 元下卷ニモ

建杭損シ

類焼之節持退キ

所々制高札改

尾州々尋

(14 a)

服穢 元下卷ニモ 服中釈奠會津々問合

御堂卜隔も候得は忌服之者不苦哉

御安置以前ニ付大学頭服穢ニ而御堂江罷出ル

御服中ニ付正遷座之祭儀不仕并私服中

聖堂前葬送通り不苦哉問合

追加目録

御寄附

布衣差拔烏帽子

薄縁

烟草盆 茶臺 杵火鉢 御紋付挑灯 弓張共 其外品多シ (14 b)
再献納

献品修復出來後家來江贈物

修復代納ニ致度

天明六丙午焼失代

迁座御用

迁座人數日講所江上ケ置

仰高門御修復ニ付胴勢門ノ

琉人通行門前固

不及迁座候得共 出馬御届之分此所ニ出ス

出馬難相成痛所

神農像醫學館江

惣坪數

(15 a)

利上ノ乾

利上卷

○取締

积菜饗應伺

以來は若年 寄月番江

出役

御免之期月候得共出役御免願

御手當願

素讀復ニ付壺兩人宛
學問御吟味

御書付渡

趣意御書付

存念書

越中守殿御書取

又存念書

學問御試書上之義ニ付存念書

再吟味

存念書

御觸出 掛り御目付懸合

寄合計御觸

書出ニ洩候而ハ頭支配不念

御吟味之趣意對談

學問筋之義御掛り

辯書差上甲乙附御褒美

宅ニ而逢

二月十日之講釈可相延哉

雜費申立

利上ノ坤

○員長江被下物 积奠調ニ付被下物此所ニ記

仰高門講釈

(16 a)

(15 b)

御觸流願

聽聞名前帳

右再伺

風損二付休

御再建御普請出來後

講釈所掛札

御座鋪講釈

聽聞名前帳

御再建御普請出來後

小入用申立

開講出座 御再建御普請出來之後ノ下

素讀

員長諸生

六役人

勤方申渡

書籍目錄渡

出火之節持退

神田祭札二埋門を開間敷

初而之枳菜二付褒賜

六役勤向取締

六役申付ル

役義取放

(16 b)

隱居

見習

出奔

奉行所江呼出シ

胴勢門仰高門

町家二階分見込

盜賊

諸生親類逐電

無集者集

立木

附火消役掛合

土堀取^(堀)

鳳閣寺地面商番所

松飾 鏡餅

四人之者來由

追加目錄

取締

書林江觸

柴野聖堂止宿

出役

轉役 長病 代人願

學問御吟味

(17 a)

(17 b)

無本御試

御觸出シ

引込中儒者中取扱

調落在之差扣伺

廣蓋拝借

御徒目付拝領物

御目付掛り被仰付

忌産穢等之者

六役人

長屋修復之義ニ付心得違答申付ル

御筆物等虫干取計

六役承止一件

四人之者

道造

北角番屋後明地

捨子

相續

改名

薪商賣人置所往來障

下掃除

○利下卷

素讀御吟味

部屋住御番入ニ付學問試

○貞上卷

普請

惣御修復

外迁座

正迁座

類焼後

大成殿仮御普請

再類焼後聖堂并御座敷仮御普請

御宝藏

書生寮饗應座前

目三条中卷ヨリ入

○貞中卷

大成殿木圖

願申立

伺

届

掛合書

小繕手限ニ而

見分 不時見廻り

御老若

(18
b)

(18
a)

(19
a)

(19
b)

(20
a)

諸役人

御普請出來後御飯屋拝領願

御土藏窓明ケ

類焼之砌

飯堂并仮囲 銅瓦取片付

屋根普請ニ付御筆御額下シ

講談所役人長屋御修復 貞ノ上

西添地 同

北添地 添地願 同

貞下乾坤

○貞下卷

御再建

外支配部三冊

通計十八冊

(21 a)
(21 b)

分類雜載公事昌平坂元卷目錄

枳菜

枳菜式

説經讀詩

六時揃

大学頭幼少長病服穢等故障在之

一
三ノ上
四
五

枳菜致延引候義不相濟ニ付

備物并器物

延引伺

御服中ニ付當八月來二月共

二月中御服中ニ付三月

御服中私義も病

私服中ニ付當二月八月共

私服中ニ付代り百助

私病氣ニ付代り百助

悴病氣ニ付一名ニて伺

悴病氣ニ付延引伺

代り百助病氣ニ付延引伺

御轉兼ニ付三月江延シ

朝鮮人來聘ニ付延引

御修復ニ付延引

樂人差支ニ付延引

不延引否

主上崩御

水戸殿卒去

近火始り刻限ハ遅成

近辺御成

御代々重キ御精進日は除候得共

六
八
八
九
十一
十二
十二
十三
十四
同
同
十七
十八
十九
二十
二十二
同
同
二十三
同
二十四

(22 a)

一通りの義ハ除不申候	
御服明二付伺	同
着服	二十六
御代替二付束帶	同
装束下足袋用	同
尾張殿分尋	二十七
六位袍	同
狩衣	二十九
嫡子	同
九歳罷成候付布衣着用	同
十歳ニ付私是迄之役義為勤	三十
老年	同
聖堂勤 御免願	同
幼年代り百助勤	三十一
表儒者	三十三
伺之事	三十三
百助連名	同
百助一名	三十五
一名伺書	同
廿日程前二伺	三十七
若年寄衆江は達不申	三十八
伺席之事	同

(22
b)

(23
a)

畧式积菜	三十九
假殿积菜記	加十七
場取引渡雨天	四十八
服穢	同
御服穢御成御座候内江伺	五十
服中二而伺書出ス	五十一
昌平分登城又昌平	五十二
丁日障	同
拝見之者	五十六
書付渡	六十
頒俎	六十二
御伽羅拝領	六十三
足痛所ニ付図書頭御供所分出ル	同
御部屋番江渡小札	同
幕張前日取立	六十四
飯張雨除桐油	六十五
饗應伺	六十七
閏正月	六十八
御名代	六十九
月次ニ积菜	七十
儒者何人宛罷出候哉	同
御幣 祝文	七十二

(23
b)

他門之者不罷出	七十三	公事
枳菜濟御届	七十五	昌平坂
樂人遅刻	七十六	枳菜
樂人出役御下知	七十七	枳菜式
拝見之義聞合	九十五	一 安永七戌四月二日酒井石見守殿用人加藤曾兵衛江徳左衛門より差遣枳菜式左之通
拝礼席	九十八	但一昨日曾兵衛方より徳左衛門まで手紙二而申越候付今日
伺濟諸向江掛合書	九十九	認差遣候事
大名衆之家来門人被差出候様奉札	百	一
門番所幕打	百貳	枳菜式 省畧
登城ニ付習札刻限遅り	百三	枳菜前日
献官并分献分奠ニ付伺	百四	聖堂及四配六從祀之供物を祭器ニ盛調ふ 大學頭役之
附御納戸御腰物方々六位袍并太刀請取一件	百四	聖前御劔を御厨子に納む 大學頭役之
諸品	百十四	祭器取調簾張替等諸生江申付之
參拝人 御構内一覽願	百廿三	枳菜當日
學規	(24 b)	御先手衆代り共兩人与力同心召連早朝參着仰高門外ニ幕打之纏鍔炮等ニて警固ス
仰高門講釈所掛札	百五十三	御目付衆御徒目付御小人目付召連早朝參着庭上より仰高門内見
廣業堂張札	百五十四	分有之朝五時御目付衆西縁頼ニ着座御徒目付壱人其後ロニ相詰
學規職員記	百五十五	御徒目付御小人目付杏檀ニ相詰祭儀拝見之者相改
薩州々頼ニ付學記認遣ス	百五十六	朝五時祭儀始り祭役之輩仰高門講釈所々庭上へ行列ニて出兩側
仰高門外高札 重復不用享卷在之	カ百十一	列立
御道具類御城江差出	百五十八	
	(25 a)	
	(25 b)	
	(26 a)	

樂人乱声ヲ吹

初献官大學頭役之 重献官終献官以上兩役大學頭兼帶之

初献官衣冠着之御代替始而并自分家務初而の积業之節束帶

重献官終献官ハ布衣役之輩役之

國子祭酒旗當時大學頭無之二付此旗不用

分献表儒者 分奠評定所勤役儒者何も布衣着用真中二列立

(26 b)

掌儀殿に上り東西見分有之香を焼き下り祭役之輩へ指圖有之

迎神樂人役之 祭儀執行ニ付神霊こゝに下りたまへといふ趣

を唱ふ

此間音樂有

帳を揚げ簾を巻き聖前四配厨子の戸を開く

初献官以下拝有之て後掌儀より兩側列立の輩不殘殿上ニ上り列

立

掌儀殿より下り初献官を迎ふ初献官介副の者を召連手水して殿

に上り聖前へ幣を献す 此間音樂有之相濟而初献官香案の前ニ

て拝有之

庭上に殘る輩皆殿に上り列立

初献官以下面々着座

傳供初献官漆階に上り聖前四配へ供物を献す

十哲へ酒を備ふ 此間音樂有之傳供之節物數四十五相濟而着座

六徒祝^(從祀)へ供物を備ふ 分献分奠之内ニて役之傳供之節物數二十

四相濟而着座

初献官漆階へ上り聖前へ酒を献す 此間音樂有之相濟而初献官

香案の前に着座此時祝文を讀

公儀より大學頭に被仰付先例のことく积業執行有之趣の文

言在之

二

(27 a)

祝文讀畢て初献官拝有之而着座

初献官重献官ニ代り漆階に上り聖前へ重て酒を献す 此間音樂

有之

相濟而拝有之着座

初献官終献官ニ代り漆階に上り聖前へ重て酒を献す 此間音樂

有之

相濟而拝有之着座聖前へ酒を献する事三度

分献漆階に上り四配へ酒を備て着座 音樂無之拝無之 四配へ酒

を備ふる事四度

分奠六從祀へ酒を備へて着座 音樂無之拝無之 六徒祀へ酒を備

ふる事六度

飲福受酢 初献官香案の前に着座聖前に献したる酒及供物を頂

戴ス

此時告文を讀大學頭祭を主とるにより此品を頂戴し公儀

御繁栄に付积業退轉なく執行有之此上弥公儀御繁栄を守

り給ふへし等之趣文言在之 但當時大學頭無之二付當分告

文無之讀畢而拝有之着座

徹供 初献官漆階に上り聖前四配の供物等を徹す 此時音樂有之

徹供之節物數五十二相濟而着座

六徒祀徹供 分献分奠之内にて役之 徹供之節物數三十相濟而着座

初献官漆階に上り幣を徹す 此間音樂有之相濟而着座 (27 b)

聖前四配の御厨子の戸を閉る

簾を下す

講釈 大學頭役之弟子共問答有之

詩を讀 初献官已下祭役之輩 聖前江献する所の詩を讀む

分献分奠の内にて役之初献官側に着座

初献官以下着座の輩起て列立す

初献官以下何も拝有之

送神 樂人役之 此間音樂有之 祭儀相濟ニ付神霊備り給へといふ

趣を唱ふ

帳を垂る

礼畢 初献官以下何も殿を下り庭上に列立 此間音樂有之

初献官以下何も拝在之退出 此間音樂有之

惣テ聖前へ献する物有之に香をたく

寛政六寅八月代替り初而之釈菜ニ付束帶にて相勤之 但先例也 此節ハ国子祭酒清道之兩旗ヲ用ル事ヲ止且太刀持是迄聖堂領名主相勤候処當年ハハ側向侍共ニ為持候事ニ相極ル

三上

(28 a)

説經讀詩

寛政六寅七月十八日例刻登城口奥肝煎坊主を以加納遠江守殿江例之御廊下ニおゐて伺事有之候間御出座被下候様為申上候処や
かて右坊主案内致故土圭之間迄罷出候処遠江守殿其所江御出懸り
にて御廊下ニ而は若年寄衆只今御用談有之候旨御申聞被成候
付左候は、新部屋ニ而伺可申段申之則新部屋ニ而例文之釈菜伺
書差出之且又別段ニ差出書付左之通

見返シ 釈菜之義ニ付伺

林大学頭

一 釈菜儀節之内説經讀詩と申式御座候而説經トハ堂上にて一通講釈致候後執役之弟子共三四人其場にて質問致候事ニ御座候
讀詩とハ右講釈畢候已後執役之者共之献詩を讀候事ニ御座候兩
様之式何も唯今迄致來候事候へ共全牀此式は昔本朝之礼典ニ釈
奠畢候以後都堂院と申別所にて執行致候事ニ御座候中華朝鮮ニ
而も同様席

(28 b)

殿之上ニ而ハ不致候由元禄以來堂上之式其外前段ニ右之例を以
饗應座鋪ニ而執行致候事ニ御座候処享保年中ハ廢し申候由只今
ハ堂上之式而已致來沿習年久敷御座候乍併前文之通古礼ニも可
相協哉と存付候上ハ心安し不申様覺申候因此今釈菜ハ相改右説
經讀詩之式都堂會集之格ニ准し饗應座鋪にて祭儀畢候以後執行
可致哉と奉存候其通饗應座鋪にて執行仕候以前正徳年中迄ハ大
名御旗本其外外來之聴衆講席ニ列り候事故混雜無之様兼而席割

ハ御目付方指圖相頼候へ共其後堂上之式斗ニ相成候以後ハ是又相止申候今度相改饗應座鋪ニ而執行仕候迎も堂上之式を移シ執行致し候事故私弟子共斗ニて相濟申候因此右説經讀詩之節ハ御目付出席ニハ及申間敷と奉存候惣而積菜之式

三ノ下

(29 a)

寛文以來定置候得共式時宜ニ應し又ハ吟味之上古制ニかなひ候儀候へハ改來り候事ニ御座候其外相改可然存候式も有之候へ共先重も立候ハ説經讀詩も兩条御座候付今積菜ハ改申度奉存候一積菜拝見之内唯今迄ハ僧山伏等差許拝觀為致候処一躰是ハ道理も違候筋ニ候間是亦今年ハ改僧山伏等ハ祭儀拝觀一切差許不申且平日迎も仰高門出入席庭裴徊等ハ禁候様致申度奉存候右之段奉伺候以上

七月

林大学頭

右書付之趣尚又委曲口上ニ而も申上例文之伺書明日頃迄ニ御下ケ被下候様仕度候別段之伺書ハ定而御評儀も可有之^{候間}一^{候間}同ニ御下ケニハ及不申候乍併習礼之節御差圖次第相心得候事故廿一二日頃迄ニ否之義御差圖有之候様仕度段申上候処御承知之旨ニて相濟

(29 b)

一 七月廿二日例刻登城遠江守殿例之御廊下ニおゐて御用談有之且此間差出置候所之積菜ニ付伺書老中方評儀之上伺も相濟候由ニて下ル尤積菜儀節改定ハ伺之通僧山伏拝見之儀ハ指許可申旨也依之右書付江承り附致シ口奥肝煎坊主を以遠江守殿差出之

承り付左之通

積菜儀式之内新ニ相改候義書面伺之通取計可申旨被仰渡承知仕候出家山伏拝見之義は只今迄仕來候通指許候様被仰渡是亦承知仕候

六時揃

一 寛政六寅八月朔日當番御目付中川勘三郎江渡書付如左
來ル二日積菜ニ付聖堂江御詰之衆積菜執行刻限之義只今迄ハ五時後ニも相成候趣ニ御座候所當年ハ諸向江六時揃と相觸燈火引候頃ハ直ニ致執行候心得ニ御座候依之來ル

四

(30 a)

三日御詰之御先手衆御同役衆江右之段御達シ可被下候以上

八月朔日

林大学頭

當御番御目付衆

一 寛政七卯年二月三日當番御目付森川主膳江渡書付如左

見返シ 御目付衆

林大学頭

積菜執行刻限之義先年ハ五時頃ニも始り候趣ニ御座候所去寅年より諸向正六時揃ニ相觸燈火引候頃より直ニ執行之積ニ致候付其段書面を以御達申御先手衆御目付衆共右刻限無相違御揃被成候所樂人斗遅刻罷出候付存之外始り延引ニ相成候依之當年ハ其段樂人江相達置候付弥去寅年八月御達申候通六時揃之旨當日御詰之衆江御達可被下候為念此段尚又

(30 b)

御達申候以上

二月三日

林大学頭

(32 a)

當御番御目付衆

一 寛政八辰二月九日村上大學江相渡書付如左

見返し

御目付衆

林大学頭

見返し

積菜之義ニ付書付

柴野彦助

大學頭幼少長病服穢等故障有之積菜致延引候儀不相濟義ニ候
一 寛政三亥七月十二日越中守殿江柴野彦助差出伺書左之通

釋奠執行刻限之義去寅八月分以來諸向六時揃ニ相定何れも右刻限被相揃候処樂人斗毎々及遅刻祭儀始り及延引候依之當春は御下知ニ而寺社奉行衆分樂人共江右刻限等申渡御座候筈ニ候間定而遅刻有之間敷候右ニ付而ハ當日御詰之御先手衆御同役衆江兼而此段御通達可被下候為念御達申置候以上

二月

五

(31 a)

一 同年八月二日御城當番所江差遣書付如左

見返し

御目付衆江

林大学頭

當年は差懸り候事故中丁ニ相伺可申候惣牀大學頭幼少長病服穢等故障有之候付積菜致延引候義不相濟義候間大學頭彦助清助三人打合
評儀之上相伺可申候
右之通越中守殿御達之趣ニて遠江守殿被仰渡候
私ニ云々、孝頭服中ニて積菜伺難相成彦助を以伺候也
備物并器物

七月

柴野彦助

(32 b)

釋奠執行刻限之義去寅八月以來諸向六時揃ニ相定何れも右刻限被相揃候所毎度樂人共致遅參ニ付自ラ諸向も遅刻相成申候當春分樂人罷出候儀刻限等迄御下知ニ而寺社奉行衆分被申渡候義ニ相極り候ニ付而ハ是迄之ことく遅參ハ無之候依之來ル四日御詰之御先手衆御同役衆右刻限無間違被相揃候様致度候此段兼而御通達可被下候尤是迄其折々右様之御掛合ニ及候へとも最早治定致候事故來年二月分は御達中間敷候間向來御申送相成候様致度候以上

八月

(31 b)

一 寛政七卯正月六日尾州竹中彦左衛門今旧様手紙差越今日及返報如左
林大学頭様
竹中彦左衛門
以手紙啓上仕候毎度御面倒之義候得共於聖堂積菜之節御備物并

器物御取扱之御式共委前承知仕度奉存候暮々午御世話曲々被仰
知候様仕度奉願候以上

十二月廿八日

右返報來紙を請御紙面之趣致承知前帑一通差遣候段認之
別紙

正位

六

簠

三個

(33 a)

但各桑秋一個を増新米を盛る

簋

三個

但一個ハ菜一個ハ黒餅五一個ハ白餅五

豆

三個

但一個ハ鳥肉一個ハ魚肉一個ハ魚子各五片宛

簋

三個

但一個ハ春久年母秋乾栗二個ハ春乾柿乾栗秋梨子葡萄

俎

三個

但鯛各一尾宛

爵

三個

四配位

簠

各一個

但桑菜を合七盛

簋

各一個

(33 b)

但黒餅三白餅二

豆

各一個

但魚肉鳥肉魚子各五片宛

簋

各一個

但簋実正位二同し各五宛合七盛

俎

各一個

但鯛各一尾宛

爵

各一個

十哲位

爵

各一個

但饌無之

六從祀位

七

爵

各一個

但饌四配二同し俎無之

疊尊

二個

玄酒を盛る新汲水なり飲福之時正位爵之酒と合七盛る

用とす

犧尊象尊

各二個

清酒を盛る

祝板

祝文を祝板に浮貼す

(34 a)

幣籠

幣を籠に盛る

(34 b)

延引伺

御服中ニ付當八月來二月共執行仕間敷候

一 寛延四未七月廿六日 釈菜伺留於御城別紙書付式通高井兵部少輔殿江圖書頭於御側衆部屋前申入候趣ハ聖堂釈菜御服中執行不仕候御届書并先例書ニ而御座候秋釈菜之義ハ只今迄大岡出雲守殿江差出候得共如何可仕候哉夫共御手前様ニも一應御覽可被成哉之旨相伺候処出雲守江相届可申旨ニて被請取一覽有之委細承知此趣可申上置候尤出雲守江も通達可申旨挨拶有之

見返シ 御服中釈菜不仕候御届書

覚

御服中ニ付聖堂釈菜當年八月來年二月兩度共先格之通釈菜執行不仕候左候へハ來年八月分釈菜執行可仕と奉存候為念申上置候以上

七月

林大学頭

林圖書頭

八

(35 a)

御服中釈菜無之先例書

覚

一 宝永六巳丑年常憲院様薨御其年釈菜無之翌七庚寅年三月釈菜有之候

一 正徳二壬辰年文昭院様薨御翌三癸巳年釈菜無之同四甲午年

八月釈菜有之候

一 正徳六丙申年後享保元年有章院様薨御翌享保二丁酉年八月釈菜有之候

但此節迄ハ一年一度宛之釈菜ニて二月相支候得ハ八月釈菜有之候義ニ御座候尤一年兩度宛相極り候義ハ有徳院様御代享保七壬寅年分被仰出候
右先例書懸御目置候以上

七月

林大学頭 林圖書頭

(35 b)

一 宝曆十一巳八月八日 釈菜伺留御服中釈菜不仕候書付并例書左之通

田沼主殿頭殿江於土圭之間大學頭差出之

御服中釈菜不仕候御届書

林大学頭

林内記

覚

御服中ニ付聖堂釈菜當年八月來年二月兩度共二先格之通釈菜執行不仕候左候得は來年八月分釈菜執行可仕と奉存候為念申上置候以上

巳八月

林大学頭

林内記

此例

宝曆元辛未年有徳院様薨御之節其年八月并翌二壬申年二月共釈菜不仕同八月分釈菜可仕旨御届申上候
右相濟而御目付當番石河玄蕃御作事奉行安藤彈正少弼江申達之

九

(36 a)

二月中御服中二付三月二至伺

一延享三寅正月 積菜伺留 敷主計頭江兩人分差出候書付左之通

覺

昌平坂聖堂積菜之儀例年二月修行仕候段奉伺候処當春ハ未御服
穢中ニ被遊御座候間延引可仕奉存候併御代替以後初而之積菜故
三月下旬ニは修行仕度奉存候此段奉伺候以上

正月

林大学頭 林内記

一明和二乙酉正月廿五日 積菜伺留 御側衆松平因幡守殿江差出
書付

御服穢ニ付二月積菜三月ニ可仕旨申上書付

林大学頭 林圖書頭

昌平坂聖堂積菜之義例年二月修行仕候段奉伺候処來月下旬迄御
服穢中ニ被遊御座候間延引仕三月執行可仕奉存候此段御届申上
置候以上

正月廿五日

林大学頭 林圖書頭 (36 b)

此例

延享三寅年三月中旬迄御服穢ニ付二月積菜延引三月下旬積菜
執行仕候旨正月末ニ御届申上候事

右書付御受取追付大孝頭江因幡守殿被仰聞候ハ書面之通即申上
候依之書付御返し之旨ニ付受取之

但右二月之積菜三月ニ相成候旨當番御目付曲淵勝次郎へ申
達之御作事奉行正木志摩守江も申談之

一同二月十五日松平因幡守殿江左之伺書差出之

三月七日ニ執行可仕旨伺之通濟伺書例文之通

一明和八年卯八月朔日差出書付 積菜伺留

當秋聖堂積菜之義例年八月執行仕候段奉伺候処來月上旬迄御服
穢中ニ被遊御座且又私義も當月廿九日迄服穢有之候付旁以延引
仕六日頃御服明之節相伺九月下旬積菜執行可仕奉存候此段為念
申上置候以上

十

卯八月

林大学頭

一同十一月廿二日 積菜伺留 御服明ニ付積菜伺書來月四日并添
書壺通稻葉越中守殿江差出ス

但四日ハ田安御日柄ニ而候付為念御聞合候旨被仰聞候付是ハ
廿二日積菜執行仕候例も御座候付不相構奉伺候尤御代々重
キ御精進日ハ相除候得共一通り之義ハ相除キ不申候

伺書ハ例文也添書如左

當秋積菜執行可仕候処御服中被成御座候付延引仕候今日御服被
為除候間上ヲ奉祝來月四日積菜執行可仕奉存候尤大納言様御服
中被成御座候得共寛延元年至心院様御逝去之節八月積菜仕候御
例も有之候付此度奉伺候以上

十一月廿二日

林大学頭

右同日伺之通來月四日と被仰出之
一寛政六寅正月廿二日口奥肝煎を以加納遠江守殿江申込於例
(37 b)

之御廊下差出書付如左

見返シ 御服穢ニ付二月積菜四月可仕旨申上候書付

林大学頭

聖堂積菜之義例年二月執行仕候段奉伺候処四月上旬迄御服穢被遊御座候ニ付延引仕四月中旬下旬之内執行可仕奉存候此段御届申上置候以上

正月廿二日

林大学頭

添差出ス 例書

明和二酉年二月下旬迄御服穢ニ付二月積菜延引三月執行仕候旨正月末御届申上候

明和八卯年 九月上旬迄御服穢ニ付八月積菜延引九月下旬執行仕候旨八月初御届申上候

正月廿二日

林大学頭

右御落手ニ而届之趣耽承置候段挨拶有之畢而積菜延引之義大目付松浦越前守江口達之

十一

(38 a)

一同四月六日登城同十九日積菜伺之通同七日被仰出之伺書例文

御服中私義も病氣ニ付

一安永二巳四月七日大学頭出勤登城積菜伺書并添書稲葉越中

守殿江差出之御請取被成候 積菜伺留

四月廿五日畧式積菜執行仕度伺書例文也添書如左

見返シ 積菜奉伺ニ付申上候書付

林大学頭

當二月積菜執行可仕候処御服中ニも被遊御座其上私義病氣罷在當月ニ至出勤仕ニ付段々延引仕候奉祝上候義ニ御座候間去々卯年十二月御服穢私義も服穢積菜仕候先例も有之候ニ付此度奉伺候以上

(38 b)

四月七日

林大学頭

一右翌八日伺之通被仰出之

私服中ニ付當二月八月共執行不仕候

一宝曆九卯正月廿八日積菜伺留 稲葉越中守殿江於土圭之間御礼過左之書付式通差出候委細御承知可申上之旨被答之

私服中ニ付積菜不仕候御届書

聖堂積菜當年二月八月兩度共私服中ニ付先格之通執行不仕候左候へハ來年二月今積菜執行可仕奉存候為念申上置候以上

正月廿八日

林大学頭

服中積菜不仕候先例書

覚

享保十七壬子年六月大内記相果候付其年

十二

(39 a)

八月翌十八癸丑年二月兩度共服中ニ付積菜不仕候段加納遠江守殿江民部少輔御届申上候以上

正月廿八日

林大学頭

天明七未正月正良公逝去ニ付同年春秋積菜不仕御届可有之事候

へ共留無之

私服穢ニ付代り同氏百助

一 寛政五丑七月十六日 釈菜伺之節添而出候書付如左 釈菜伺例
文

見返 釈菜之儀ニ付伺

林熊藏

私儀養父服中罷有候付來月 聖堂釈菜林百助相勤候様可仕哉此段
奉伺候以上

七月十六日

林熊藏

同十八日 釈菜伺之通相濟次ニ百助名代之義も可為伺之通旨是亦
被仰渡

一同六寅四月六日 右同断之節添而出ス書付

見返シ 釈菜之義ニ付伺

林大学頭 (39 b)

私儀養父服中罷在ニ付當月 聖堂釈菜去年十二月之通林百助相勤
候様可仕哉此段奉伺候以上

四月六日

林大学頭

一 寛政十二申二月十九日 御目付分問合

聖堂釋奠之儀御忌服中ニ而も在之候哉又ハ御忌服中ニ候へハ被
相延候哉有無之儀致承知度及御懸合申候以上

二月十九日

羽太庄左衛門 小長谷和泉守

答 聖堂釋奠御忌服中ニ而も有之候哉否之義御問合之趣得其意
申候御忌服中ニ而ハ日延相延候事ニ御座候重キ御忌服中ニ而ハ
廢祭ニ相成申候依之及御答候以上

二月十九日

林

(40 a)

十三

病氣ニ付代り百助

一 寛政五丑正月十四日 釈菜伺留 加納遠江守殿江以使者差出伺
書如左

見返シ 病氣ニ付釈菜之義伺

林大学頭

私儀去十一月初旬分痰積ニ而只今以不相勝引込罷在候最聖堂
釈菜執行之時節間も無御座候得共近々出勤可仕牀無御座候依之
先例も御座候間林百助釈菜相勤候様可仕哉此段奉伺候以上

正月十四日

林大学頭

同十九日 御同人分家來御呼出シ伺書ニ御附札ニ而下ル如左

伺之通釈菜之節林百助可被相勤候

(40 b)

悴病氣ニ付一名ニ而伺

一 明和七丑二月二日 釈菜伺留 釈菜伺例文書稲葉越中守殿江差

出

但此節圖書頭病氣ニ付一名ニ而相伺

悴病氣ニ付延引伺

一 延享四卯八月 釈菜伺留 藪主計頭殿江差出書付如左

覚

當月九日 釈菜之義相伺候処其通被仰出執行可仕候処内記義瘡疾
今以相勝レ不申候私忝人ニ而難相勤役義等多在之候付可罷成

儀二候ハ、九日之積業延引仕度奉願候勿論九月執行仕候先例も有之候得は内記快氣以後又々積業之義相伺候様仕度奉存候此段奉伺候以上
林大学頭

卯八月

十四

(41 a)

代り百助病氣ニ付延引伺

一 寛政五丑八月二日口奥肝煎坊主を以加納遠江守殿江差出伺書如左

見返シ 積業日限延引之義申上候書付

林熊藏

聖堂積業伺之通來ル七日執行可仕旨被仰出候処同氏百助義痛所御座候而引込罷在候少々快方ニは御座候得共右之節迄ニハ出勤之程無覺束奉存候旨申間候依之先例も御座候間御延引被成下候様仕度奉存候日限之義は痛所平愈之様子次第猶又追而可奉伺候以上

八月二日

林熊藏

同人間もなく罷出御落手之旨申之左候ハ、直ニ大目付御目付等ニも延引之段可申哉と申候処今一應伺参り可申旨申之同人又罷出弥御承知之旨御達可被成旨申之

一 大目付當御番御目付當番江右延引伺濟候段左様御心得候様ニと之旨口達之御作事奉行坊主を以呼出シ右延引ニ付御幕張之義可被得其意旨是亦口達ス

一 大目付當御番桑原伊豫守右延引之義一寸書付被遣候様ニと

被申候付坊主衆岩原孝伯を頼坊主へや二て書付文言申付為相認候左之通
(41 b)

來ル七日積業執行可仕旨先達而伺相濟御達申候処百助事痛所在之右ニ付延引之義今朝伺候処伺之通被仰出候付左様御心得可被成候右之段御達申候以上

八月二日

林熊藏

右孝伯を以伊豫守殿江相渡候後刻伊豫殿江逢候処御書付致落手候乍去諸家江百助病氣之義ハ不申候唯延引と計申候間左様心得候様ニと被申之

但右延引之義御老若部屋番江達可申処致失念罷歸候付翌三日朝專阿弥へ以手紙右之段頼遣候処致承知早速可申達旨返報來ル

一 八月十九日例刻登城口奥肝煎坊主を以遠江守殿江差出書付如左

見返 積業之義ニ付伺

林熊藏

聖堂積業先達而奉伺當月七日執行可仕候処同氏百助痛所御座候而引込罷在候付又々奉伺御延引被仰出候痛所平愈次第可奉伺候処今以睨と不仕當月中出勤之程無覺束奉存候先例も御座候間九月中百助出勤仕候而日限可奉伺哉と奉存候又ハ先例ハ無御座候へ共左之者共之内代り被仰付執行可仕候哉

十五

(42 a)

人見七之助 柴野彦助 七之助忤人見安太郎

右三人者共之内代り可被仰付候ハ、日限相伺當月中執行可仕候
此段奉伺候以上

八月十八日

林熊藏

例書

延享四卯八月

當月九日積菜之儀伺之通被仰出執行可仕之處内記儀瘡疾今以相
勝レ不申私忝人二而ハ難相勤役義等も多在之候付可罷成候ハ、
九日之積菜延引仕度奉願候勿論九月執行仕候先例も有之候へハ
内記快氣以後又々相伺候様仕度奉存候段申上之伺之通相濟九月
二至執行仕候

類例

(42 b)

宝曆九卯正月廿八日

聖堂積菜當年二月八月兩度共私服中ニ付先格之通執行不仕候段
申上之

先例享保十七子年六月申上八月并翌年二月執行不仕候

宝曆十辰正月廿六日

當二月積菜日限可奉伺候処恐悦之義ニ付御祝儀等有之候得ハ先
格之通三月中積菜執行可仕奉存候段申上之伺之通相濟正月廿五
日執行仕候

是は御轉任御兼任之節 先例寛保元酉八月

宝曆十辰八月

聖堂御修復ニ付積菜不仕翌年二至御修復出來之後三月廿一日執

行仕候

宝曆十一巳八月八日

御服中ニ付聖堂積菜當八月來平^年二月兩度共

十六

(43 a)

先格之通執行不仕候段申上之

先例寛延四未七月

宝曆十四申年正月廿八日

聖堂積菜例年二月相伺執行仕候処朝鮮人來聘ニ付相延三月二至
執行可仕旨申上之同三月廿九日執行仕候
明和八卯八月朔日

御服穢并私義も服穢罷在候付聖堂積菜御服明以後九月下旬二至
可相伺旨申上之同十二月四日執行仕候

安永二巳四月七日

當二月積菜執行可仕候処御服中ニも被遊御座其上私儀病氣罷在
當月二至出勤仕候付段々延引仕候段申上之同四月廿五日執行仕
候

八月十八日

林熊藏

右兩通差出之

一 八月廿日致登城候処口奥肝煎坊主罷越遠江守殿御逢被成候
旨申之間もなく

(43 b)

新番所溜江御出座積菜伺之義ニ付彼是御尋有之委細存念申上之
一同廿五日加納遠江守殿家來今用人共迄後刻於御城遠江守殿

御逢被成度旨手紙來ル即刻登城以口奥肝煎登城候段申上之
一時計之間上廊下御側衆部屋前ニおゐて遠江守殿御出座枳菜
之儀當月延引來月尚又日取可伺旨被仰聞之先達而差上候伺書并
例書共式通下ル

一 枳菜延引之義大目付御目付江口達之

一 十月廿二日例刻登城口奥肝煎を以加納遠江守殿江申上候義
有之段申込候処やかて御出座例之御廊下ニおゐて枳菜來月二日
執行仕度段例書之通認差出之添而差出書付如左

見返 枳菜手代り之義ニ付御届

林熊藏

私義養父服中ニ罷在候付來月聖堂枳菜之儀先達而伺相濟候通林
百助相勤候様可仕奉存候此段御届申上候以上

十月廿二日

林熊藏

右御落手之上申上候ハ自由ケ間鋪ハ候ヘ共來月聖堂ニおゐて學
問御吟味相初リ不申前ニ取懸リ申度候ヘハ前々致來リ之用意も
在之被仰出候而之後問合無之

十七

(44 a)

候而ハ諸事差支候間例明後日頃罷出否之義奉伺御振合ニハ御座
候ヘ共何卒此度ハ明日御沙汰被成下候様仕度段申之候処左候
ハ、今少扣可罷在旨被仰聞候間もなく御逢可被成旨又々口奥を
以被仰聞刻罷出候処枳菜伺之通來月二日可致執行旨被仰渡之奉
畏候段御請申上之相濟

一大目付桑原伊豫守江枳菜伺相濟候段口上ニ而申達之例差出

候書付今日不致用意候処即刻伺相濟候ニ付何刻御宅迄右書付仕
立可差進旨談置退出後宅今手紙ニて差遣候処請取候段返報來ル
書付ハ例文也

一 御作事奉行曲測出羽守江右日限并御幕張等之義例之通口達

一 御目付江も日限之義口達

一 御老若其外部屋番江遣小札之義專阿弥江談置退出後宅今手
紙ニて宅江遣候処致落手候明日同役申談取計可申旨返報來ル

御轉兼ニ付三月江延シ

一 宝曆十辰正月廿六日 枳菜伺留於殿中田沼主殿頭殿江差出

書付左之通

(44 b)

覚

御附札 可為伺之通候

當二月枳菜日限可相伺之処恐悦之義ニ付御祝儀等有之候得は先
格之通三月中枳菜執行可仕奉存候此段奉伺候以上

辰正月廿六日

林大学頭

此例

寛保元辛酉年八月御轉任御兼任御元服御祝儀等有之ニ付九月
枳菜執行可仕旨加納遠江守殿江相伺候処伺之通被仰渡候
右書付二月朔日御附札ニ而可為伺之通旨被仰渡御書付下ル依之
内々為心得當番御目付淺野内膳江枳菜月延之趣達之且又御作事
奉行安藤彈正少弼江申談候ノ訳ハ聖堂御修復留帳江委細記之故
畧之

一同三月四日積菜伺書稻葉越中守殿江差出伺之通濟書付ハ例文也 同廿五日執行

十八 (45 a)

朝鮮人來聘ニ付延引

一 宝曆十四申年正月廿八日 積菜伺留 當二月積菜之義朝鮮人來聘ニ付私共御用多ニ御座候間三月ニ相延申度旨伺書松平因幡守殿江差出候処因幡守殿へ被仰聞候は御仲ヶ間衆御評儀被成候処朝鮮人二月十日前ハ着府不致候間十日前ニ執行致し候事不相成候哉御尋ニ付大學頭申上候ハ積菜廿日程前ニ日限相伺極候而支度仕仮張等申付弟子共江も觸出申候事ニ御座候只今ハ取繕候而八十日前執行難相成旨申上候へハ尤之由ニて伺書御請取被成候 當二月積菜相延三月ニ仕度旨伺書 林大學頭

覚

聖堂積菜之義例年二月日取相伺執行仕候処當年朝鮮人來聘ニ付相延三月ニ至日取相伺候様可仕奉存候此段奉伺候以上

正月廿八日 林大學頭

右二月朔日伺之通三月ニ相延候様因幡守殿被仰渡之御目付當番江も申達之 (45 b)

一 三月八日伺同廿九日執行 伺書例文

圖書頭事母方祖母之服中故大學頭一名ニ而差出之

御修復ニ付延引

一 宝曆十辰八月十八日 積菜伺留 田沼主殿頭殿江差出書付如左

積菜延引之義申上候書付

林大學頭 林内記

覚

當月積菜日限先達而可相伺答ニ御座候御修復御取懸り御沙汰有之候付只今迄見合罷在候得共今以御取懸り無之候御代替已後初而之積菜御座候間何分執行仕度奉存候得共最早當月日間も無之候故來月恐悦以後御修復御取懸り無御座候ハ、日限相伺執行可仕奉存候為念申上置候以上

八月

林大學頭 林内記

十九

(46 a)

右之書付差出置候付九月廿二日於殿中主殿頭殿大學頭江被仰聞候ハ聖堂御修復取懸り之義當春中は出火ニ付諸色高直ニ付入札取直等有之候而延引ニ相成候得共最早只今頃ハ取懸り候半と存候処段々延引致候ハ相模守殿等閑ニ被致候事と被存候間明日ニも相模守殿江一應對談致し早速取懸り候様ニ可申談候旨被申聞候大學頭申候ハ御修復御積り御勘定江下り居り候様ニ風聞承候併急度は難申上候間委細彈正少弼江御尋被成候ハ、可相分義と奉存候旨申之主殿頭殿被申聞候ハ左候ハ、今日彈正江承り明日相模守殿江申談取懸り差急候様可致候就夫御修復取懸り候ハ、積菜相延候而も不苦候哉と被申聞候付申上候ハ上之思召ニ而御修復御取懸り有之候へハ當秋積菜明年迄相延候共不苦義と奉存候故なく相延候義ハ當年恐悦も御座候へハ何れニも取繕執行仕度旨申之承知之旨主殿頭殿御挨拶有之

九月廿八日田沼主殿頭殿へ御宅にて差出書付如左

聖堂御修復ニ付積菜延引之義申上候書付 林大学頭 林内記
當秋積菜之義此度恐悦以後相同執行可仕候旨先達而申上置候処
此節御修復取懸り御作事奉行江被仰付候付延引仕候尤御代替初
而之義ニ御座候へハ御修復出來正迁座相濟候 (46 b)

以後日限相同執行可仕奉存候為念申上置候以上

九月廿八日

林大学頭 林内記

右御修復相濟翌年宝曆十一巳二月廿九日伺三月廿一日執行伺
書例文

樂人差支ニ付延引

一 安永十丑正月廿九日 積菜伺留 百助登城積菜 二月十八日執
行之伺書稻葉越中守殿江差出ス翌晦日伺之通相濟 伺書例文

一 二月七日百助方江東儀筑後守今手紙にて申越候は來ル十八
日孝恭院様御贈官位之御供會ニ付同役共不殘罷出候様昨六日被
仰渡候依之十八日積菜之節執役推仕之旨斷申來右ニ付翌八日稻
葉越中守殿登城前長坂徳左衛門差出御内意相伺候処積菜十八日
日取相延シ伺直し可仕旨御差圖有之翌九日百助登城御同人江差
出書付

覚

來ル十八日積菜奉伺候処伺之通執行可仕旨被仰渡候処十八日

廿 (47 a)

孝恭院様御贈官位御法會於東叡山有之候付十八日之日取相延廿

九日ニ執行仕度奉存候依之尚又奉伺候

一 積菜被仰出候ハ、當日例之通御先手衆已下例文

二月九日

林百助

一同十日百助登城候処積菜伺之通被仰渡之

御部屋番江御用へや坊主にて小札遣候

二月十八日積菜被仰出候処孝恭院様御贈官位御法會有之ニ付相

延

二月廿九日積菜

右前日御寄附物御使者被遣候事

大目付大屋遠江守江相渡書付左之通

二月十八日積菜被仰出候処孝恭院様御贈官位御法會有之ニ付相
延

二月廿九日積菜

右前日五時今八時迄万石以上寄附物御使者參着候事 (47 b)

二月

林百助

御作事奉行江御幕張之義當番御目付へ積菜日限之義例之通申達
ス

一天明九酉正月廿八日 積菜伺留 登城加納遠江守殿江二月十八

日積菜執行 伺書例文 差出候処翌廿九日伺之通被仰出之

一 二月九日登城左之伺書加納遠江守殿江差出

積菜伺之通來ル十八日執行可仕旨被仰出候処來ル十八日乘臺院
様御法事ニ付樂人不殘上野江相詰ニ付積菜出役難相成旨東儀大

隅守今申越候依之积菜日限之義尚又別日相伺候様ニも可仕哉此
段奉伺候以上

二月九日

林大学頭

右差出候処日限伺直可申旨被仰渡候依之即刻再伺御同人江差出
左之通

見返

积菜再伺

林大学頭

覚

來ル十八日积菜奉伺候処伺之通執行可仕旨被仰渡候然所

廿一

(48 a)

十八日於上野乘臺院様御法事在之候付十八日之御日取相延廿二
日執行仕度奉存候依之尚又奉伺候

一 积菜被仰出候ハ、已下例文

二月九日

林大学頭

右遠江守殿被成御受取明日可致登城旨被仰渡候

一同十日登城候処积菜伺之通來ル廿二日執行可仕旨遠江守殿

被仰渡候

大目付松浦和泉守江相達書付左之通

二月十八日积菜被仰出候処乘臺院様御法事有之ニ付相延

二月廿二日积菜

右前日五時今八時迄万石以上寄附物使者參着候事

二月

林大学頭

御老中方御側御用人若年寄衆遠江守殿御へや番ニ相達左之通

二月十八日积菜被仰出候処乘臺院様御法事ニ付相延

(48 b)

二月廿二日积菜

右前日御寄附物御使者被遣候事

一加納遠江守殿思召ニ而御部屋番江相達小札認直差出左之通

二月十八日积菜被仰出候処御故障之義有之相延

二月廿二日积菜

右前日御寄附物御使者被遣候事

不延引否

主上崩御

一 宝曆十二午七月廿五日 积菜伺留主殿頭殿江大学頭伺^候斗ハ此

度主上崩御ニ付普請鳴物等廿八日迄御停止候へ共廿九日^候棧敷

仮張等例年^候差急取懸^候リ木、七日积菜之間ニ随分合イ申候乍然

御時節之儀殊々主上様ニて仙洞御所共違御在位之崩御ニ候得ハ

御慎之

廿二

(49 a)

御様子之程も相伺申度奉存候ニ付御手前様迄御聞合申上候御内

分御伺被成可被下哉尤只今迄二八月积菜之節ニ差懸リケ様相障

候義無之ニ付先格不申上候享保十七年靈元院様崩御之節ハ亡父

服中ニて积菜無之此度ハ新規ニ御座候付先内伺仕候旨申上候へ

ハ主殿頭殿御答ニ随分不苦候様奉存候尤思召之程相伺可申候へ

共京都ニ而御取扱御在位御讓位之差別無之上ハ积菜延引ニ不及

存候夫共内分伺置候而明日御父子之内江可得御意候旨被仰聞候

事同廿六日内記登城之處主殿頭殿被仰聞候ハ昨日大孝頭内伺被申候釈業之義不苦候間弥七日執行可仕旨ニ思召候左様御心得弥執行可被致候奉畏候旨申之

同七月十五日釈業來月七日執行伺候処同十六日伺之通相濟在之

水戸殿卒去

一 明和三戊二月廿一日 釈業伺留 因幡守殿松平江大学頭相伺候ハ昨日水戸殿御逝去ニ付鳴物停止廿六日迄と被仰出候事故廿七日之釈業無御構執行仕候而も不苦様ニ奉存候へ共尚又御手前様迄内分申上候段申候所随分廿七日は無御構候半と存候へ共尚又同列共江も申達候上可得御意と被仰聞候而其後被仰聞候ハ

(49 b)

廿七日釈業弥何之無御構執行被致候様ニと被仰聞候付奉畏候旨申之

二月六日釈業伺廿七日執行可仕哉と伺即日伺之通相濟有之
近火始り刻限遅成

一 宝曆十三未二月十九日 釈業伺留 朝御徒目付海老沢源左衛門江申達候ハ昨夜六半時過柳原辺出火ニ付迁座板倉撰津守人数も相詰父子共立合申候段今朝御月番壱岐守殿江御届申上候右ニ付昨夜堂内之飾物等悉藏江片付ケ置火鎮り候而九つ時過迄ニ出し置今朝ニ至飾付申候右之子細故今朝甚不手廻シ始り之刻限少々遅成可申候此旨式部少輔殿吉川御出待合御談可申候所最早装束

所江罷越装束用意も仕諸事堂内向キ差図等も仕候付其元江得御意置候間此闌式部少輔殿御出次第可被申達旨申聞之

近邊御成

一 安永六酉二月十五日 釈業伺留 百助登城之處御目付日下十郎兵衛被申聞候ハ來ル十八日遠御成御沙汰有之候聖堂向寄通御之由右様之節先例

廿三

(50 a)

釈業相止候義旧記等ニ有之哉相糺申候様ニ被申聞候付承知之旨答之

一同十六日登城日下十郎兵衛江相渡書付左之通

來ル十八日聖堂取寄御成御沙汰御座候付釈業延引仕候義も旧例有之哉内記方旧記并聖堂留書等相調候所旧例無御座候且古老之者共相尋候処何も相覺不申段申聞候以上

二月

林百助

右書付相渡釈業執行可仕哉又ハ延引之伺可差出哉之旨十郎兵衛江懸合候処一存ニ而難及御挨拶候間御右筆衆江問合可然旨ニ付懸り御右筆萩原金十郎江問合候処是亦一存ニて難及挨拶旨同役中相談之上可及挨拶候旨暫相扣候処金十郎被申聞候は御道筋等も隔り候事故無構執行致し可然旨併火之元等随分入念可然旨被申聞候付百助承知候旨答之

十七日御目付分申來ル雜司ヶ谷筋江御成當日雨天御延引御道筋ハ留無之

一寛政七卯二月積菜日限兼而伺濟五日執行之處前日四日昼寄
出入之御小人目付分明五日小石川筋へ御成御沙汰之旨御道筋水
道橋分春日町白山 (50 b)

通り還御上紺差町傳通院前小石川御門通り之由申來ル例吟味候
処安永六酉二月十八日積菜之節同十五日御目付分十八日御成御
沙汰有之候聖堂向寄通御之由被申聞先例も無之二付同十六日御
目付相談之上奥御右筆萩原金十郎江問合候処同役相談之上御道
筋も隔り候事故無構執行可然旨申之候間留在之 雜司ヶ谷辺御
成然所御道筋は不知 雨天ニ付御成御延引旁執行無滞相濟候右
之例も有之御小人目付分内沙汰而已ニて御目付分ハ昼頃迄不申
來候へ共夕方申來候共右例も有之義弥執行之積相極候万一本郷
通りと申事小急ニも伺候筋ニ可有之哉ニ而夕方至小石川辺御
成之節御目付分申來ル
右之通候付翌五日無滞執行相濟候

御代々重キ御精進日條候へ共一通り之義ハ除不申候

一明和八卯十一月廿二日積菜伺留來月四日積菜候伺書稻葉越
中守殿江差出候処御受取被成候

廿四 (51 a)

但四日ハ田安御日柄ニ而少為念御聞合候旨被仰聞候付是ハ廿
一日積菜執行仕候例も有之候ニ付不相構奉伺候尤御代々重キ御
精進日ハ除候へ共一通り之義は相除キ不申候

御服明ニ付伺

一明和八卯十一月廿二日積菜伺留御服明ニ付積菜伺書稻葉越
中守殿江差出候
伺書ハ例文之通認添而差出書付如左

見返 積菜奉伺候付申上候書付 林大学頭

當秋積菜執行可仕候処御服中被成御座候付延引仕候今日御服被
為除候間上を奉祝來月四日積菜執行可仕奉存候尤大納言様御服
中被成御座候得共寛延元年至心院様御逝去之節八月積菜仕候御
例も有之候ニ付此度奉伺候以上

十一月廿二日 林大孝頭 (51 b)

一明和二酉正月積菜伺留二月下旬迄御服穢ニ被成御座候付積
菜延引仕三月二至可奉伺段御届申上置二月十五日差出伺書如左
來月七日御障之義も無御座候ハ、聖堂積菜執行仕度奉伺候已
下例文

右之通ニ而御服明之字無之

一安永二巳四月七日積菜伺留大学頭出勤登城積菜伺 四月廿
五日執行例文也 稻葉越中守殿江差出ス 正月二月之内延引御届
無之添書如左

見返 積菜奉伺候付申上候書付 林大学頭

當二月積菜執行可仕候処御服中ニも被遊御座其上私義病氣罷在
當月ニ至り出勤仕候付段々延引仕候奉祝上候義候御座候旨去々
卯年十二月積菜仕候先例も有之候付此度奉伺候以上

四月七日 林大学頭

一 寛政六寅正月廿二日二月積菜之義四月上旬迄御服穢被成御座候付延引仕四月中旬下旬之内可奉伺旨御届申上置同四月六日差出伺書如左

廿五

見返シ 積菜伺

林大学頭

當春積菜執行可仕候処御服中被成御座候付當正月御届申上延引仕候御服も被為除候間當月十九日御障之儀も無御座候ハ、執行仕度奉伺候

一 積菜被仰出候ハ、已下例文

(52 b)

着服

御代替ニ付束帶

一 宝曆十一巳三月廿一日積菜伺留積菜之節同十九日主殿頭殿江差出書付如左

見返 御代替ニ付積菜之節私并忤内記束帶着用之義申上候書付 林大学頭

口上覚

當春は御代替以後初而之積菜ニ付私并忤内記束帶着用仕候延享三丙寅年三月廿七日之節民部少輔并私束帶着用仕候段數主膳正殿江御届申上候例を以此段申上置候以上

三月十九日

林大学頭

一 寛政六寅八月三日積菜初而勤候付束帶着之天明五巳八月天明八申二月兩度留無之

廿六

装束下足袋用候義

(53 a)

一 明和二酉八月 積菜伺留 三日御目付松平縫殿頭為場所引渡被參候付云云装束下足袋用候義多候^兩共昨日失念不申達候付其段斷申達之

一 明和六丑八月 積菜伺留 十七日積菜前日御目付柘植三藏被參候節父子共足袋相用候段申達

一 明和八卯十二月二日 積菜伺留 登城之節積菜之節例之通足袋相用候旨為念申達候段御目付本目隼人江申達

一 明和九辰二月十八日 積菜伺留 為引渡御目付土屋長三郎相越候節我等装束下足袋斷申候旨申達候承知之旨挨拶有之

(53 b)

尾張殿令尋

一天明六年七月八日尾州御城附坂本逸平治令問合并答左之通

附私答^札

積菜之節ハ狩衣御着用御座候哉御官位已前は布衣御着用御座候哉

積菜之節ハ衣冠致着用候部屋住ニて布衣之節は六位之衣冠致着用候

一 寛政十二申七月廿三日釋奠日取之儀問合新殿釋典部下二認

廿七

(54 a)

六位袍

一 宝曆十一巳三月十九日 积菜伺留主殿頭殿江差出書付如左

見返シ 积菜之節忤内記六位之装束着用之義申上候書付

林大学頭

口上覚

明後廿^一日积菜之節忤内記去年三月廿八日見習被仰付七月十八日布衣被仰付候へハ先年私布衣之節相用候六位之装束着用為仕候為念申上置候以上

三月十九日

林大学頭

此例

大学頭事林泰助 後内記

右元文三戊午年五月廿八日見習被仰付八月廿七日积菜之節布衣未被仰付以前加納遠江守殿江御届申上六位之装束着用仕候

一 安永三年八月十四日 内記幼年二付代り百助积菜執行相勤候

節 积菜伺留稲葉越中守殿江百助持參之書付左之通

(54 b)

見返シ 积菜之節私義六位装束着用之儀申上候書付

林百助

口上覚

私父百助布衣被仰付候節今积菜兩度共二六位之装束着用仕候間私儀も明後十六日积菜之節今六位装束着用仕候為念申上置候以上

八月十四日

林百助

一 寛政三亥七月十二日松平越中守殿江柴野彦助を以差出伺書如左

見返シ 积菜之義二付書付

柴野彦助

林大学頭義來八月七日迄曾祖母服中二罷在候依之八月五日上丁^三积菜大学頭上^三献難相勤候二付同姓百助名代為相勤執行可仕候所元來三献ハ只今迄諸大夫ニて勤來也^〇尤先百助儀は大学頭家後見仕候節ハ布衣被仰付候故六位之仮袍を以相勤申候當百助儀は布衣以下御座

廿八

(55 a)

候得共积菜當日六位仮袍着用為仕大学頭名代相勤候儀苦かるましき哉此段御内意奉伺候以上

七月

柴野彦助

右當年ハ差懸り候事故中丁二相伺可申候惣躰大学頭幼少長病服穢等故障有之候付积菜致延引候義不相濟儀候間大学頭彦助清助三人打寄評儀之上相伺可申候旨越中守殿御達之趣ニ而遠江守殿被仰渡候

(55 b)

一 寛政五丑正月廿二日 积菜伺留遠江守殿江以使者差出書付如左

私儀病氣ニ付同氏百助积菜相勤候様被仰渡奉畏候初代今故百助迄は布衣被仰付六位之袍着用仕候當百助儀は無官ニて御座候間装束之義は如何相心得可申哉此段奉伺候以上

正月廿二日

林大学頭

同廿四日家來呼出附札を以被仰渡附札如左

六位袍可被致着用候

狩衣

一 宝曆三酉八月七日 稗業伺留 出雲守殿江大学頭申上候ハ内記
義見習前 當秋分私只今迄之役義為相勤申候乍序申上候段申之
候且又民部少輔儀も 聖堂勤御免二付 先格之通狩衣ニて拝礼罷出
申候段申候へハ旁目出度存候旨御挨拶有之

廿九

(56 a)

尤御序之節可申上之旨被仰聞候

嫡子

内記九歳罷成候付布衣着用差出

一 宝曆二申八月十五日 稗業伺留 御礼過圖書頭居殘大岡出雲守
殿退出之節於陰土圭申達候は忤内記儀當年九歳罷成候此度之稗
業分布衣着用為仕差出申候勿論私七歳之節罷出候先例も有之
候御目付衆も被參候付外分御聞被成候而ハ如何ニ付為念申上置
候御序ニ被達上聞可被下旨申之候へハ先格之通御差出候段目出
度存候御相續之基と存候早速可申上之旨被仰聞候
又申候は此段高井兵部少輔殿江も被仰達可被下之旨申候得は委
細相心得候而通達可申候旨被相答候事

但祭之前日廿日昌平坂江引越罷在候節御目付脇坂主計江圖書
頭申達候は忤内記當年分稗業之内拝礼ニ差出候段申達候へハ
被入御念被仰聞候目出度

(56 b)

存候段挨拶有之二付即為逢申候廻御先手柳原大膳江も引合候
忤内記十歳當秋分私只今迄之役義為勤候

一 宝曆三酉八月七日 稗業伺留 出雲守殿へ大学頭申上候ハ忤内
記義當秋分私只今迄之役義為相勤申候乍序申上候御聞置可被下
候段申之候へハ被致承知旨御挨拶有之

老年

聖堂勤御免願

一 宝曆三酉六月七日 稗業伺留 若年寄御月番松平宮内少輔殿江
大学頭同姓字兵衛を以差出ス願書 程村豎紙

私儀老衰仕近年耳遠ク相成當春以來別而行歩不自由御座候而

世

(57 a)

聖堂稗業之節階之外降等難儀仕候依之聖堂勤被遊御免先格之通
忤圖書頭江稗業之儀被仰付被下候様仕度奉願候九月次之講稗等
之儀は何とそ為冥加只今迄之通相勤候様仕度此段奉願候以上

宝曆三癸酉年六月七日

林大学頭居判

板倉佐渡守殿

小出信濃守殿

松平宮内少輔殿

一 七月廿九日被仰渡之書付

林大学頭

年寄候迄數年相勤其上大納言様へ御學問をも申上候付而御小性
組番頭之次へ可罷出候

右芙蓉之間相模守申渡之老中列座若年寄中侍座

(57 b)

林大学頭 大学頭忤同圖書頭
大学頭老衰不行歩罷成候付而如願聖堂之勤御免被誠候圖書頭義

唯今迄大学頭通可相勤候

右於土圭間相模守申渡之老中列座若年寄中侍座

大学頭事民部少輔 圖書頭事大学頭

右兩人名改之願書宮内少輔殿江差出候処可為願之通旨御附札にて早速相濟候事

世一

(58 a)

代り百助勤

一安永二巳十二月廿一日於御右筆部屋於縁頼御老中御列座若年寄衆侍座御用番佐渡守殿林百助江被仰渡候御書付如左

林内記幼年之事二付月次講釈并聖堂釈業其外御用等内記頃立候迄ハ其方可相勤候依之布衣被仰付

林百助

向後席之義法印法眼之醫師次も可被罷出候

一寛政五丑正月十四日 釈業伺留 加納遠江守殿江以使者差出伺書左之通り

見返シ 病氣ニ付釈業之義伺

林大学頭

私儀去ル十一月初旬迄痰積にて只今以不相勝引込罷有候(58 b) 寂早聖堂釈業執行之時節間も無御座候へ共近々出勤可仕牀無御座候依之先例も御座候間林百助釈業相勤候様可仕哉此段奉伺候以上

正月十四日

林大学頭

同十九日家來呼出御附札にて下ル

伺之通釈業之節林百助可被相勤候

一同廿二日御同人江以使者差出伺書左之通

私儀病氣ニ付同氏百助釈業相勤候様被仰渡奉畏候初代今故百助迄ハ布衣被仰付六位之袍着用仕候當百助義は無官ニ而御座候間装束之儀は如何相心得可申哉此段奉伺候以上

正月廿二日

同廿四日家來呼出御附札二而下ル

六位袍可被致着用候

世二

(59 a)

一寛政五丑七月十六日 釈業伺書加納遠江守殿江差出御受取相濟候上にて差出書付如左

見返 釈業之義ニ付伺

林熊藏

私儀養父服中罷在候付來月聖堂釈業林百助相勤候様可仕哉此段奉伺候以上

七月十六日

林熊藏

同十八日 釈業伺之通被仰出次ニ百助名代之義も可為伺之通旨被仰渡

一同年十月廿二日 釈業伺書遠江守殿へ差出添而差出書付如左

見返 釈業手代り之義ニ付御届

林熊藏

私義養父服中罷在候付來月聖堂釈業之義先達而伺相濟候通林百助相勤候様可仕奉存候此段御届申上候以上

十月廿二日

林熊藏

一 寛政六寅四月六日 積菜伺書遠江守殿江差出候添而差出書付如左

見返 積菜之義二付伺

林熊藏

私義養父服中罷在候付當月聖堂積菜

(59 b)

去年十二月之通林百助相勤候様可仕哉此段奉伺候以上

四月六日

林大学頭

右翌七日積菜伺相濟候節百助名代之義伺之通たるへき旨被仰渡之

世三

(60 a)

表儒者

例は無御座候得共表儒者之内代り可被仰付候哉

一 寛政五丑八月十九日 積菜之儀二付伺書左之通

見返 積菜之義二付伺

林熊藏

聖堂積菜先達而奉伺當月七日執行可仕候処同氏百助痛所御座候而引込罷在候付又々奉伺御延引被仰出候痛所平愈次第可奉伺之処今以耽と不仕當月中出勤之程無覺束奉存候先例も御座候付九月中百助出勤仕候而日限可奉伺哉と奉存候又ハ先格ハ無御座候へ共左之者共之内代り被仰付執行可仕哉

人見七之助 柴野彦助 七之助倅人見安太郎

右三人者共之内代り可被仰付候ハ、日限相伺當月中 (60 b)

執行可仕候此段奉伺候以上

八月十八日

林熊藏

例書

延享四卯八月

当月九日積菜之義伺之通被仰出執行可仕候処内記義瘡疾今以不相勝私忝人二而ハ難相勤役義等も毎有之候処可相成義候ハ、九日之積菜延引仕度奉願候勿論九月執行仕候例も有之候へハ内記快氣以後又々伺候様仕度奉存候段申上之伺之通相濟九月二至執行仕候

類例

宝曆九卯正月廿八日

聖堂積菜当年二月八月兩度共私服中ニて先格之通執行不仕候段申上之

先例享保十七子年六月申上八月并翌年二月執行不仕候

世四

(61 a)

宝曆十辰正月廿六日

当二月積菜日限可奉伺候処恐悦之義二付御祝義等有之候得は先格之通三月中積菜執行可仕奉存候段申上之伺之通相濟三月廿五日執行仕候

是は御轉任御兼任之節 先例寛保元酉八月

宝曆十辰八月

聖堂御修復二付積菜不仕翌年二至御修復出來之後三月廿一日執行仕候

宝曆十一巳八月八日

御服中ニ付聖堂積菜當八月來年二月兩度共先格之通執行不仕候
段申上之

先例寛延四未七月

宝曆十四申年正月廿八日

聖堂積菜例年二月相伺執行仕候処朝鮮人來聘ニ付相延三月二至
執行可仕旨申上之同三月廿九日執行仕候 (61 b)

明和八卯八月朔日

御服穢并私義も服穢罷在候付聖堂積菜御服明以後九月下旬二至
可相伺旨申上之同十二月四日執行仕候

安永二巳四月七日

當二月積菜執行可仕候処御服中ニも被遊御座其上私義病氣罷在
當月二至出勤仕候付段々延引仕候段申上之同四月廿五日執行仕
候

八月十八日

林熊藏

右兩通口奥肝煎を以遠江守殿へ差出之同廿五日当月延引來月尚
又日取可伺旨御同人被仰聞之

世五

(62 a)

伺之事

百助連名伺書

一 天明五巳八月六日積菜伺留稲葉越前守殿江差出來ル廿三日
積菜伺書例文 大学頭百助連名にて出ス

但去ル四日大学頭勤向并叙爵被仰付百助大病ニ付大学頭尙

人罷出伺之

百助一名伺書

一 安永三年二月積菜伺留より天明五巳春迄

一名伺書

一 明和元申八月積菜伺留五日奥御右筆伊藤百助大学頭へ相尋
候ハ當秋積菜伺ハ兩名去秋當春一名にて被差出候如何之訳二候
哉之旨ニ付去秋當春ハ圖書頭服穢有之候故拙者一名にて伺書差
出候付答候処猶又同役近山六左衛門を以申越候付翌六日左之書
付圖書頭を以差出之 (62 b)

積菜伺兩名一名にて差出候訳書

林大学頭

積菜伺之義前々今兩名にて相伺亡父民部少輔當職之内拙者見習
被仰付候も兩名にて相伺民部少輔聖堂勤御免之後ハ拙者一名ニ
て相伺宝曆十年辰三月廿三日圖書頭見習被仰付同年八月積菜御
修復ニ付延引之義相伺候節今前例之通兩名ニ而相伺來候而去未
ノ八月ハ圖書頭母方叔父半藏之服穢有之伺候節ハ拙者一名にて
差出シ積菜當日ハ服明罷出相勤候當春ハ圖書頭母方祖母服穢有
之候付拙者一名ニ而相伺尤積菜ニも罷出候此度ハ右服明圖書
頭障も無之候間前々之通兩名にて差出ル為念以書付得御意候以
上

申八月

林大学頭

一 明和七寅八月積菜伺留朔日積菜伺松平因幡守殿江差出ス
但圖書頭去年以來病氣にて未出勤無之候付一名ニ而差出ス

一同年二月 釈菜伺留 朔日右同例 明和八卯二月右同例

廿六

(63 a)

廿日程前二伺

(63 b)

一 延享四卯二月二日 釈菜伺留 奥御右筆桜井七左衛門大学頭江被申聞候は釈菜之義前月伺候先例有之候哉と被相尋候付左之書付出之

聖堂釈菜前月伺候例

一 寛保三年癸亥正月廿五日加納遠江守殿迄二月十三日之祭儀相伺候事

一 延享三丙寅十月廿二日敷主計頭殿迄八月四日祭儀伺候事

一 延享四年丁卯正月十五日敷主計頭殿迄二月十日祭儀伺候事

右之外二も前例在之候近キ頃は此通二而御座候尤聖堂祭儀二付造作等有之義故廿日程も前二伺候事御座候以上

二月

林大学頭 林圖書頭

翌三日同人申聞候唯今迄御側衆江斗御伺被成候哉と尋被申候付成程

廿七

(64 a)

大御所様御代は有馬殿加納殿小石州江も差出申候大方ハ遠州殿御忝人ニて御幕御目付御先手之義も相濟候主計殿時分より若年寄江彼方ハ御断被成候事ニ相成候段答之

一 寛延元戊辰七月十三日 釈菜伺留 漸催促ニて同廿日伺濟候大

岡出雲守殿へ圖書頭申候ハ右祭儀之義は弟子共六十人斗江も觸流し仕尤棧敷仮張等も所々申付候義廿日程も前二申付候付伺候義度々御催促申上候旨申候へハ出雲守殿承知也

(64 b)

若年寄衆江は達不申

一 宝曆九卯八月 釈菜伺留 十八日登城候所山本春阿弥申聞候ハ當八月釈菜之義有無如何と尋候付當正月廿八日稲葉越中守殿江私服中ニ付二月八月共ニ釈菜不仕候御届書并享保壬子之例書共差出候処可被仰上之旨ニて御請取有之候段申候処若年寄方江御届等ハ無之事ニ候哉ト申候付釈菜有之候節伺書之趣ヲ以其節之御側衆ハ若年寄衆江被仰通候義御座候勿論先々ハ釈菜之義は御側衆方御取計之事故有無共若年寄方江御届申上候義は無之旨申述之

一 寛政五丑七月十六日 釈菜伺書 加納遠江守殿江差出シ同十八日伺之通相濟御同人書付御渡_戻シ定而若年寄衆江も達候義ニ可有之哉之旨御尋有之自分申上候ハ右伺之義先祖之時分御直ニも伺事有之右之格ハ出候而御側御用御取次へ伺事ニ而別段若年寄衆へ達候義無之旨申之御同人御承知之上左候ハ、右書付戻し候様被申聞則差上候処若年寄衆へは此方ハ達可申旨被申之

廿八

(65 a)

伺席之事

一 寛政五丑七月十六日 釈菜伺書 加納遠江守殿へ差出ス右差出

候場所之義何方二而候哉留書不相分候付用人共へ尋候処土圭之間上廊下御側衆部屋前之由二覺居候段申之候登城之上口奥肝煎小川貞佐を呼出シ為積菜伺致登城候段遠江守殿へ達呉候様申之且又伺場所右之趣委細咄シ乍去急度いたし候書留ハ無之事候へハ若場所致相違候而ハ恐入候付如何心得可申哉之段遠江守殿へ伺呉候様申達候処彼是往復在之土圭之間上廊下御側衆部屋所^{前二而}可差出旨遠江守殿御差圖之旨貞佐申聞則右之席二而差出候事

一寛政六寅七月十八日積菜伺二罷出如例口奥を以遠江守殿へ例之御廊下江御出座被下候様為申上候処やかて右場主致案内之故土圭之間迄罷出候処遠江守殿其所江御出懸り御廊下二而ハ若年寄衆只今御用談有之候旨御申聞被成二付左候ハ、新部屋二而伺可申段申之則新部屋ニて例文之伺書并別段之書付差出ス

但別段之書付ハ説經讀詩之式之義且僧山伏拝見差留申度と之書付也

猶又委細口上二而も申上候事

(65 b)

畧式積菜

一明和九辰八月十五日積菜伺留登城旧年藤右衛門江別紙書付見七候而談候ハ聖堂類焼後飯御堂出來無之候而ハ本式積菜執行不相成候間自分二而可致畧祭と存候左候へハ兩御側衆へ伺書差出候積菜寄附物之儀二付右近將監殿何角御世話被下候様二承及候乍然様子御存知無之候哉と存候間御側衆へ書付差出可申候内別紙之趣委細御内々被仰上被下度存候旨申候尤御法事中御伺被

下候へハ廿三日頃御側衆へ伺書差出候旨申候へハ藤右衛門被致承知畧祭二而も寄附物可有之事欸一被存候委細は御内意伺上可申由被申候間拙者申候ハ飯御堂出來相應二も積菜相成候二ハ祭器入用二御座候先年致献上候諸家江被仰渡出來候義二可有之卜存候其義も先達而御側衆へ書付差出置申候此度も御内々被仰上可被下候其上二而以書付可申上候寄附物之義右近將監殿御世話被下候へ共拙者所存ハ第一祭器第二寄附物と存候祭器出來之儀は偏奉願候畧祭二而も寄附物有之候義ハ右近將監殿御裁斷次第之儀二御座候旨

廿九

(66 a)

申候得は藤右衛門祭器之義万石以上江被仰渡候義二御座候間右近將監殿江申上候而宜存候由被申之

一八月廿日登城藤右衛門被談候ハ先日御書付昨日出羽守殿江入御覽候処出羽守殿被申候ハ飯仕切之義ハ先達而諸向江申達置候其外ハ御入用之事も無之候間右近將監殿へ申上候様被仰聞候付後刻入御覽可申候旨申上候而右近將監殿江申上候処積菜不相成卜申儀ハ如何之訳二候哉と御尋被成付祭器不殘焼失仕候付本式積菜相成不申候右二付元禄年中献納諸家分右之品々致献納候様被懸御声被下候様願書差出可申候由二御座候段申上候得は委細御承知被成候前々之形相知候哉と御尋二付留帳在之由申上候諸家分寄附物之義は先達而春秋兩度積菜と相定候義二而畧式二而も積菜御座候得は指出候義^とは被存候此段ハ思召二在之様子二

相見へ申候使者差出候節御受取場所所有之候ハ、畧祭相極候上ニ而大目付衆江も被仰達可然候旨被申候ニ付座敷向相殘候ニ付寄附物請取候場所所有之候由答之且又伺書之内畧式積菜ト相改可然候旨申之左之書付右近將監殿入御内見候上ニ而書役例之通御側衆へ差出之

積菜之義ニ付申上候

林大学頭 (66b)

例年八月積菜執行之義奉伺候得共仮御堂出來仕候迄は場所無之候付積菜執行難仕候仮仕切出來仕候ハ、上ヲ奉祝候義ニ御座候間自分畧祭可仕奉存候此段御届申上置候以上

辰八月

林大学頭

右之伺書文言相改左之通

積菜之義ニ付申上候書付

林大学頭

例年八月聖堂積菜執行之義奉伺候得共仮御堂出來仕候迄は場所無之候付本式積菜執行難仕候書院内仮仕切出來仕候ハ、上ヲ奉祝候義ニ御座候間畧式積菜可仕奉存候此段御届申上置候猶又仮仕切出來仕候ハ、日限之義可申上候以上

八月

林大学頭

一同廿一日白須甲斐守殿江右之書付差出猶又口上ニて申上候ハ書院内仮仕切出來仕候ハ、積菜日限十日程以前ニ可申上候尤場所も無之義御座候間御目付衆

四十

(67a)

御先手衆被參候ニ及不申候寄附物之義は請取候場所所有之候間差

支申義無御座候旨申之

一同廿五日甲斐守殿大学頭御呼被成御内談候趣ハ先達而被差出候書付とくと致一覽候所随分相分り候乍併致評儀候所上ヲ被祝候事仮仕切ニ而畧式之積菜候而も御目付御先手不參候而ハ上之御祭儀輕く相聞へ候一組難差出候ハ、半組ニ而も相詰候形ニ致度事ニ候御目付なども場所無之候ハ、かげニ成共相詰候様ニ致度事ニ候此儀は其元方ニ而は前々兩役之衆へ掛合料理差出來候事故右之儀ニ而難相成と申事ニも候哉とくと申談候上可相極と今日相談し申候尤先方之様子一度も不致拜見事故如何様之振合ニ候哉難相知候故とくと御了簡被成繪圖等被成可差出旨被仰聞其上前日寄附物も有之御徒目付も參候事故旁御目付も被參候方可然哉之旨被仰聞候大学頭御答申候は先以思召寄御評儀之上御内意被仰聞忝奉存候尤此義ハ未表立不申出候追日日限申上候節其義為可申上相伺申候事御座候私取初之存寄ハ畧式之積菜内弟子共ニて為相濟候積其之上拜見之者も無之事故御幕之義も不申上門固メ之義も不申上候拜礼之衆も無之事故御目付衆之義も不申上候心得ニ罷在候所被仰聞候趣ニ而ハ何分了簡仕可申上候

(67b)

同勢門ヲ固メ候御先手一組被參同勢門内ニ仮番所御建被下候様ニ仕度奉存候御目付中被詰候所も縁頼ニ御座候故右ニ准し見繕ヒ候様ニ可仕候掛合等指出候義ハ相障り候義も有之間鋪トハ奉存候へ共尚又勝手向役人共へ相尋候上菓子吸物ニ致替候様ニも

可仕候尤繪圖等仕可差出旨申之尤甲斐殿被仰聞候ハ此度之樣成
義ハ前後初而之儀候間如何樣共致了簡可申上候旨ニ付委細奉畏
候旨申上之

一廿七日登城白須甲斐守殿へ懸御目申上候ハ一昨日畧式枳菜
之儀ニ付御心入之義被仰聞辱奉存候罷歸相尋候処御目付御先手
へ懸合料理差出候義且又同心御小人江例之通赤飯遣候義相支候
義無之候畧式之義為差義も無之候付御目付御先手衆被參候二も
不及義と奉存候得共思召之通官祭も輕く相成候樣ニ御座候付御
目付御先手被相詰并御幕之義も奉願候樣可仕候且前日御徒目付
兩人寄附物之節相詰候樣仕度候且又先日ハ枳菜日限ハ十日程以
前と伺書差出申候樣申上候へ共大目付ハ觸出并諸家ニ而支度之
間も可有之候間十六七日前ニ差出可申由申上候得は御用多二も
有之候間前日御徒目付罷出候義も伺書之内江書加へ差出候樣御
差圖有之候則畧式枳菜ニ付御目付着座繪圖并御先手衆仮番所場
所并幕張繪圖式枚差出候へハ請取候由被申候

四十一

(68 a)

袋表書

聖堂畧式枳菜ニ付

繪圖式枚

林大学頭

繪圖式枚別ニ有之

繪圖疊表之表書

仮仕切之内御目付着座繪圖

林大学頭

御先手仮番所場所并御幕張繪圖

林大学頭

一同日白須殿不懸御目已前新庄能登守江右之繪圖見セ候而仮
仕切仮番所等枳菜間ニ合候樣御出來可被下候御幕張之義前日寄
附物も在之候間前日早朝ハ張候樣ニ被仰付可被下候前々ハ手前
ニ而幕張候得共不殘致焼失候間重而奉納有之候迄は御幕被仰付
被下候樣頼入候尤兩御側衆ハ其以前御聲懸り候樣可致旨申之
一廿八日於御城甲斐守殿被仰候ハ昨日之繪圖幕張之方ニは間
數有之御先手番所之方ニ間數無之候ニ付間數付候而可被差出旨
被仰候付大亭頭答候ハ是ハ御作事奉行新庄能登守振合承合候処
間數之義は御作事方江繪圖下り候上御先手江御番所間數何程ニ
而宜と申儀御目付ハ相尋候上極り申候趣ニ付夫故私方ハ

(68 b)

場所斗申上間數は態と書出シ不申候尤此場所石がんぎ在之夫ハ
門際迄九間有之候何樣ニも一組之番所ハ立可申地面ニ御座候
一先達而可返と申書付此事ニ相障不申候ニ付其俣差置候度被

仰聞候付左候ハ、八月之積菜九月ニ仕候と申御届と思召可被下候旨申之

但白須殿内談之趣内ニ而藤右衛門へ物語いたし御序之節御目付御先手へ參候義ニ相成候様子御序ニ右近將監殿御出勤之節御物語可被下旨相頼候処委細承知之旨藤右衛門挨拶在之

一 九月三日登城白須甲斐守殿へ畧式積菜伺書差出之無滯御受取明日可被仰聞由

畧式釋菜伺

覚

林大学頭

當月廿二日御障之儀も無御座候ハ、聖堂畧式積菜執行仕度奉存候

一 積菜被仰出候ハ、當日例之通御先手衆御目付衆被參候様仕度候且又御幕之義も奉願候將又前日御徒目付

四十二

(69 a)

兩人罷越候様仕度候被仰渡可被下候以上

九月三日

林大学頭

一同日甲斐守殿被仰聞候ハ先日被差出候畧式積菜ニ付御先手飯番所之儀御入用之儀ニ候間昨日右近將監殿出羽守殿へも申談置候間出羽守殿江も繪圖添書日付ハ相除被差出可然候繪圖は拙者方ニ有之候間借可申哉と被申候間私方ニ扣有之候由答之則於御城添書相認奥御右筆御入用懸上村政次郎にて出羽守殿へ差出

之

見返

聖堂飯仕切ニ而積菜仕候付

御先手飯番所之義奉願候書付

林大学頭

聖堂飯仕切ニ而此度畧式之積菜仕候付別紙繪圖面之通御先手飯番所出來仕候様仕度奉願候以上

九月

林大学頭

一同四日登城甲斐守殿被仰聞候積菜伺之通相濟候間廿二日執行可有之候此度之義御作事奉行等江對談有之哉其外之義は例之通若年寄衆へ拙者方可申達之旨ニ付奉畏候旨御請申上御作事奉行へ先刻對談仕候段申上之万石以上江觸之義當春之通大目付池田筑後守江申達書付相渡候所此度ハ小野

(69 b)

日向守番ニ候間可致轉達候由被申之御目付桑原善兵衛江も廿二日積菜之義其上前日御徒目付罷越候様申達之此度は飯仕切ニ而致積菜候間各方着座之所も繪圖面追而相渡可申段達之御作事奉行新庄能登守江も積菜日限并御幕之義申達之能登守別段被申聞候は御先手飯番所繪圖面拙者へ下り申候右近將監殿出羽守殿被仰聞候は辰年也^道年々兩度飯番所出來ニ而ハ御入用も懸り候義候間可致差畧由ニ候胴勢門有來番所取繕御先手方致承知候ハ、左様ニも可相成候相除候義無之候哉と被申候付積菜當日ハ拙者方出入一切為致不申埋門ニ差懸飯番所仕つらい致出入候積ニ御座候へハ少も相除候義無之候拙者存候ハ唯今迄積菜之節上番所ニ与力相詰下番所ニ同心相詰候間胴勢門番所ハ下番所ニ相成可申

候付仮番所致出來与力相詰申候場所ニ相成可申と存候間申上候旨申候へハ御先手方へ懸合ノ上有來番所取繕候義も可有之候箱番所ハ進可申候間埋門番所御取懸御無用可被成候由被申聞之

一同日上村政次郎江聖堂書院仮仕切十三四日頃迄ニ出來申候而も御厨子持退候俟ニ差置候間仮壇江致迁座候節安座之祭いたし其上ニて枳菜致習礼候間餘程之日數懸り申候間仮仕切繪圖早々下り候様致度段申候へハ政次郎最早下り候由被申之

四十三

(70 a)

一 七日登城新庄能登守江申談候ハ仮仕切之義十五日限出來不申候得ハ相支候義有之候其訳は十七日聖像致迁座候而迁座之祭有之其上ニ而十九日致習礼候間遲り候共十六日限ニ致出來候様致度候仮仕切門ニ致迁座候間門出來合不申候ハ、門柱斗ニ而も不致出來候而ハ相成不申候扉等は廿日迄ニ致出來候而も不苦候由申候へハ能登守被答候ハ兼而十五日限出來候様申付置候へ共十六日限ニ相成可申候義も可有之候小串七十郎矢嶋源四郎江も申付置候由被申候且又御先手仮番所之義有來番所へ仮張道具を以仕足候様可致旨被申之且又小串七十郎矢嶋源四郎江も從拙者申達之候

一同九日登城奥御右筆深谷喜四郎申聞候ハ枳菜之節御先手衆仰高門江被相詰候事ニ候哉と被申候付此度ハ胴勢門江被相詰候事御座候明日書付御渡可申旨答之

見返

林大学頭

枳菜之節御先手勤番所前ニ仰高門候得共此度仮仕切ニて枳菜有之候付胴勢門ニ相成候以上

(70 b)

九月

林大学頭

一同十日奥御右筆江右書付差出候処前日御徒目付之義去卯年冬より罷出候事候哉と被相尋候付去冬當春共二前日致出役候今度枳菜伺書例年と違御徒目付之義差出候ハ白須甲斐守好ミニ付書出候段御心得之為申達候旨喜四郎承知之旨挨拶在之

一同十二日深谷喜四郎申聞候は枳菜ニ付御目付面々へ相渡し候書付若年寄御取扱加納遠江守殿服穢ニて嫡子之服月番故不苦哉と被相尋候付大学頭相答候ハ只今迄若年寄衆御服穢ニ而御取扱之義覺不申候乍併枳菜伺御側衆御用御取次以服穢産穢之節ハ御取扱無之候依之先年高井兵部少輔殿腫物ニて御引籠田沼主殿頭殿ニハ産穢ニ而候故御兩所江推差^推出候間若年寄大岡出雲守殿江拙者申上候ハ御側衆御兩所右之通ニ付御手前様御新役之義ニは候得共今度之枳菜伺差出シ可申候間御取扱被下成候哉之旨申候処成程今度は拙者取扱可申旨被仰聞候儀有之候左候へハ決而服穢は私方ニて相改御側衆へ只今迄差出來候段申之

但出役御目付も服穢等ハ被相改候殊更先年服穢之衆被參候様成儀前々日

四十四

(71 a)

承之候付内々外之御目付江相達右服穢之人被相除候事も在之旨も申之

一喜四郎又申聞候は御徒目付先日出役之義は先達而御物語之通二候へハ兼而御目付も承知之義故例若年寄衆分御目付江渡し候書付二ハ書加へ不申候旨被申付随分其趣ニ而宜旨答之

一廿日喜四郎被申聞候ハ唯今迄御書付御先手衆裏門迄被相固候義有之候と被申二付拙者相答候ハ裏門と申候ハ胴勢門之義ニ御座候段申之

但御先手衆江も拙者方分勤番所胴勢門相成候趣書付相渡可申存候段申之

一同日松浦与次郎被申聞候ハ仰高門ハ通語無之候哉と被申付當時ハ仰高門額もはつし置申候先日大風故之節添木等致置候乍然講釈聴衆之者往來等有之候當日右番所入用二候ハ、相渡申候義ハ差支無之由申之又々被申聞候は此度枳菜御場所替候由二候間右之繪圖請取申度由二付繪圖相渡之諸事明日右場所にて御談可申由申之且前日寄附物之節出役御徒目付姓名書付遣申候未服穢ハ相改不申候間明日別人參候儀も可有之候由被聞之

御徒目付 尾本藤右衛門 神谷清太夫 (71b)

一同日御作事奉行新庄能登守明後日枳菜二付御幕之義申達之一同日加納遠江守殿橋本喜八郎二而被仰聞候ハ服穢二付寄附物ハ服明之節可相納之由二付諸家寄附物之節ハ御徒目付も罷出候義且先達而右京太夫殿御服中兩度御差出被成候義候間同敷ハ御服穢之趣御使者口上有之明日御差出被成候様奉存候右之御心得二て宜被仰上被下候様答候へハ喜八郎被致承知候

一廿一日為場所受取御目付松浦与次郎被參候付仮仕切江致案内着座等之儀申談之且明日祭儀之節拙者義は大紋致着用候百助義は長袴致着用候諸生共義は鬘斗目半袴為致着用候段も相達之五時拙者罷出供物等致候間相濟候ハ、御案内可申候間御出席可被成候旨申達之且着座等之書付相渡之

一同日御先手石尾七兵衛被參候付勤番所并着座之所等書付相渡之代り荒井十太夫被參候答之由

十九日畧式枳菜習礼在之 昌平日乗

一同廿二日枳菜天氣好諸事首尾能相濟候

一同廿三日白須甲斐守殿江昨日畧式枳菜首尾能相濟候寄附物も春中銀子貳兩之所金百疋二相成候も御座候右帳面并別紙貳通御渡申候へハ甲斐守殿天氣も能相濟別而珍重存候趣被申之

四十五

(72a)

但越中守殿江は帳面相認以德左衛門用人江為持遣候

一同日藤右衛門江右帳面右近將監殿御声懸り候付春中銀貳兩之所金百疋二相成候家多在之候全御吹挙故と忝奉存候宜御取繕被仰上被下候様二申候へハ藤右衛門承知之旨被申之帳面ハ右近將監殿御留被成候

一同日出羽守殿へ藤右衛門二而帳面懸御目申候処御同前御悦被成候由且又先達而日光御社參御道筋聖堂裏通り土蔵修復之義申達有之候未修復之牀無之候其上類焼候土蔵も有之候由如何二相成候義二成と御尋之趣二付類焼仕候ハ宝蔵二而御道具共々致

焼失候追而御道具等致出來候へハ寂初御建被下候儀ニ御座候へハ奉願候義ニ相心得罷在候相殘候ニヶ所土藏ハ御記録等も入置候處雨漏も仕候間積業用事相濟候へハ修復取懸り候段申上之右之段藤右衛門申上候處宝藏之義御承知被成候由被申聞候

一同日大浪千右衛門江申候は能登守殿へ御懸合申候箱番所廿一日迄二被遣候様ニと家來分其元へ懸合候由拙者義は參候義と存候處參不申候昨日は天氣能候間相濟申候重而ハ不參候而ハ不相成事ニ候御取込ニ而御失念も可有之坎と存候間能登守殿江不申入候内其元へ申達候重而ハ無間違被遣候様御帳面ニ御留置被下候様申達候得は

(72 b)

千右衛門答候ハ下役之者江呉々申付置候如何間違候哉重而ハ急度相廻候様可仕候御心得之義忝奉存候由申之

一去廿一日御徒目付衆江相渡候書付

見返シ

林大孝頭

一 祭儀五時初候間其以前御參着可被成候

一 祭前御案内次第飯御供所前へ御着座可被成候

一 祭儀相濟執役之者致退出候上ニ而諸家寄附致献備候ハ、直

ニ御引取可被成候以上

九月

林大学頭

一同日御先手衆江相渡書付

見返シ

林大学頭

一 祭儀五時相初候間其以前御參着可被成候

一 前々仰高門御勤番所ニ候へ共此度は書院飯仕切而畧式積業ニ付胴勢門ニ相成申候棧敷無之候間祭儀之内ハ座鋪ニ御着座可被成候

四十六

(73 a)

一 祭用之者ハ前々之通御通可被成候自分并使等ハ裏通埋門江相廻可申旨御組衆致差圖候様被仰渡可被下候尤手前分も門外へ足輕出置申候以上

九月

林大学頭

一 畧式積業 明和九辰八月始り 安永二巳四月七日伺同廿五日

同年七月廿一日伺八月七日 安永三午二月終九日伺廿一日執行

一 安永三午二月九日 積業伺留 畧式積業伺書出ス 例文畧式ノ

二字多シ 節添而差出ス書付如左

當二月積業執行之義正迁座相濟候後可仕と奉存候趣申上置候得共諸家分献備之祭器等出來候義廿日過迄ニ相揃申間鋪哉ト奉存候間此度ハ先於御飯仕切去秋之通畧式積業執行可仕哉ト奉存候祭器等大駄ニも相揃候次第正迁座可仕奉存候此段御内々奉伺候以上

二月

林百助 (73 b)

一 安永二巳四月廿二日 雜載 飯仕切幕張埋門箱番所胴勢門内御

先手番所之事新庄能登守江申遣覚

以手紙申候來ル廿五日積業ニ付飯仕切前幕張之義明廿三日夕方

迄二被仰付可被下候且又埋門箱番所も明夕迄相廻候様被仰付可

被下候已下畧以上

尚々胴勢門内御先手番所取違之義被仰付被下候哉承知仕度
候以上

右返報相應致承知候則申渡候御端書被仰聞候胴勢門内御先手番
所取違之義も先達而畧式枳菜之節之通可申渡候左様御心得可被
成候

一 安永三年二月廿二日 百助日乗 畧式祭儀辰刻初マル予布衣着
用書生共麻上下

四十七

(74
a)